
ドラえもん&クレヨンしんちゃん ～ひまわりの未来冒険記～

朝日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもん&クレヨンしんちゃん　　ひまわりの未来冒険記

【Nコード】

N4156D

【作者名】

朝日

【あらすじ】

時は西暦2011年。ネコ型ロボット暴走事件から4年が経った。5歳児になったひまわりが、ひょんなことから、キッドやドラマ協力のもと、ふたば幼稚園の友人たちと未来を冒険することになるのだが……………。

キャスト紹介（前書き）

前作から4年後という設定になっているので、まずは一部のキャストから紹介します。

キャスト紹介

〈主要キャスト紹介〉

野原ひまわり

…ふたば幼稚園ひまわり組の5歳児で、相変わらずのイケメン好き。みさえとしんのすけを足したような性格で、ふたば幼稚園史上最強の問題児となっている。今回はそんな彼女が物語の主人公である。

野原みさえ

… 34歳でひまわりとしんのすけの母親。相変わらず強情で見栄っ張り。ダイエットが続かず、ひまわりとしんのすけに三段腹と言われる始末。現在はひまわりに手を焼いている。

野原ひろし

… 40歳でひまわりとしんのすけの父親で、双葉商事東京本社第一営業部課長。39歳で係長から課長に昇進。安月給だった係長時代に比べて、野原家での発言力は強くなった。しかし、相変わらずみさえには弱い。普段はダメ亭主であるが、いざとなった時は本当に頼りになる男である。

本田ひとし

… ふたば幼稚園ひまわり組の5歳児。母に本田ケイ子を持つ。ひまわりとは赤ちゃん時代からの幼馴染み。性格はケイ子に似て気が強

く。ひまわりとはよく口ゲン力をするが、基本的には仲良しである。今回はひまわりと共に冒険することになる。

本田ケイ子

…34歳で、みさえとは中学・高校時代の同級生。年下の男性と結婚し、現在は5歳のひとしを持つ。普段は温厚で優しく、みさえの愚痴を聞いてあげているのだが、みさえ同様に酒グセが悪く、かつて同窓会で大騒ぎし、当時5歳のしんのすけが謝罪をしたことがあった。

赤松洋介

…ふたば幼稚園ひまわり組の5歳児で、ひまわりとひとしの友人。「洋ちゃん」と呼ばれ、親しまれている。塾に通っており、賢く、頭がいいが、気弱な性格である。今回、ひまわりと共に冒険することになる。

青山晶子

…ふたば幼稚園ひまわり組の5歳児で、ひまわりとひとしの友人。
可愛い女の子で性格もよく、ふたば幼稚園のアイドル的存在。女の子の中で一番最初に、幼稚園一の問題児であるひまわりと仲良くなった。今回、ひまわりと共に冒険することになる。

緑川大成

…ふたば幼稚園ひまわり組の5歳児で、ひまわりの友人。活発で元気で強気な性格の持ち主である男の子。ひまわりとは常に行動を共にし、馬鹿をやるため、
「二番目の問題児」という位置付けになっている。今回、ひまわりと共に冒険することになる。

ドラミ

…22世紀の東京に住むネコ型ロボット。現在、セワシをドラえもん任せ、キッドと一緒に暮らしている。今回はひまわりたちの冒険をサポートすることになるのだが……………。

ドラ・ザ・キッド

…ドラえもんズのメンバーで、アメリカの西部開拓時代で保安官を勤める傍ら、タイムパトロール隊員としても活動する。ドラミと一緒に暮らしている。今回はドラミと共にひまわりたちの冒険をサポートする。

ドラえもんズ

…ドラえもん、王ドラ、ドラメッド、マタドローラ、ドラニコフ、ドラリーニョにキッドに加えた、伝説の秘密道具、親友テレカの持ち主である。今回は、ひまわりたちのサポートをするキッドとドラミをサポートしていくことになる。

野原しんのすけ

…春日部市立ふたば小学校四年生で10歳。小学校スポーツ少年団のサッカークラブに在籍していて、四年生ながら、六年生に混じって、エースナンバー

「11」を背負う。5歳の時のような性格は薄れているものの、明るく活発なところや、友達思いの優しさは変わっていない。今回は、ひまわりたちの冒険を、不安に思いながらも、応援する。

佐藤マサオ

…春日部市立ふたば小学校四年生で10歳。あの戦いで、泣き虫を卒業し、ネネと両想いになった。漫画家を目指している。

桜田ネネ

…春日部市立ふたば小学校四年生で10歳。あの戦いで、マサオと両想いになると同時に、リアルおままごとをやめた。マサオとの結婚を夢見る。

ボーちゃん

…春日部市立ふたば小学校四年生で10歳。鼻水は垂れなくなった

が、その分くしゃみの回数が多くなった。パイロットを目指している。

河村やすお

…春日部市立ふたば小学校四年生で10歳。しんのすけと共にスポーツ少年団のサッカークラブに在籍し、四年生ながら背番号「10」を背負う司令塔。しんのすけとのホットラインでチームの得点を重ねる。目標は日本代表、欧州の強豪クラブでプレーすることである。

風間トオル

…私立カスカビアン小学校四年生で10歳。ふたば幼稚園卒園後、私立校に入学した。休日はしんのすけたちと遊ぶ。目標は東大合格。

酢乙女あい

…私立カスカビアン小学校四年生で10歳。風間トオルのクラスメイト。卒園後は東京の世田谷に戻る予定だったが、あの事件をきっかけに、しんのすけたちのいる春日部に残ることを選択した。携帯電話でネネと情報交換をしている。

野比のび太

…春日部市立ふたば高等学校普通科一年で16歳。野球部に所属し、一年春から7番ショートでレギュラーを獲得した。新チームではトップバッターを勤める。

ジャイアン（剛田武）

…春日部市立ふたば高等学校普通科一年で16歳。野球部に所属し、一年春から5番ファーストでレギュラーを獲得した。新チームでは4番ピッチャーを勤める。

骨川スネ夫

…春日部市立ふたば高等学校普通科一年で15歳。野球部に所属し、一年春からベンチ入りした。新チームでは2番セカンドを勤める。

源しずか

…春日部市立ふたば高等学校普通科一年で16歳。吹奏楽部に所属し、のび太たちのいる野球部の応援に、力を入れている。のび太と将来を約束している。

出来杉英夫

…私立開成高校一年で16歳。のび太たちとは違い、東京に残った。目標は東大合格。

よしながみどり

…ふたば幼稚園ひまわり組担任で29歳。しんのすけに続いて、そ

の妹であるひまわりを受け持つことになり、毎日手を焼いている。
一児の母でもある。

松坂梅

…ふたば幼稚園ばら組担任で29歳。恋人である徳郎の死後、なかなか新しい恋に踏み出せないでいる。よしながの良き理解者。

上尾ますみ

…ふたば幼稚園さくら組担任で28歳。子供嫌いは解消された。3年前に黒磯と結婚し、一児の母である。

桶川竜子

…元埼玉紅さそり隊のリーダーで23歳。ふたば幼稚園で臨時教員として働いている。しんのすけの妹であるひまわりにも絡まれている。

園長先生

…ふたば幼稚園の園長。しんのすけ同様、ひまわりにも組長と呼ばれている。

この時点で紹介出来るのはこのくらいです。ひまわりたちの冒険がいよいよ始まる!!!!

キャスト紹介（後書き）

次回から本編スタートです。お楽しみに♪

あれから4年だゾ（前書き）

いよいよ本編に入ります。今回は前作と違って、小刻みに投稿します。読んでくれる人をあんまり待たせるのもどうかと思うので……
……。では、第二作の記念すべき第一話をどうぞ……！！

あれから4年だソ

西暦2011年。

あの戦いから四年が経った……………。

しんのすけたち春日部防衛隊のメンバーは、小学校四年生になり、
風間とあいはい私立校へ、それ以外は市立のふたば小学校に通っていた。

のび太たちは中学を卒業後、出来杉以外が春日部市立ふたば高校に
入学した。何も起こらない平和な日々。四年前に起きた出来事が信
じられないくらいに……………。しんのすけやのび太たちは、あ
の戦いで春日部の英雄となり、市民栄誉賞を授賞したのだった。そ
のため、学校に通っていても、一目置かれる存在となっていた。野
原一家も平和な日々が続いていた……………。

「母ちゃん行つて来まーす!」

「行つてらっしゃーい!」

しんのすけが元氣良く学校へ出発した。野原家の一日が始まったのである。

「さあて……………、後はと……………」

みさえはそう呟くと、未だに夢の中にいるもう一人の我が子のもとに向かった。

「ちっぴー……………」

みさえは呆れながら言った。そして、我が子が被っている布団を無理矢理はがして、

「ひまわり！！いい加減に起きなさい！！何時だと思ってるの！？また幼稚園に遅刻しちゃうでしょ！！」

と怒鳴った。

「うゝん…………。もう少しだけ……………」

ひまわりはそう言うと、また布団を被ってしまった。みさえはそんなひまわりを見て、頭に血が昇ってしまった。

「ひまわりー！！！！いい加減に起きんかー！！！！」

みさえはそう叫びながら、ひまわりを無理矢理起こし、グリグリ攻撃を敢行した。

「オラオラオラ！！！！」

「母ちゃんやめてよ……………」

ひまわりは、みさえの容赦ないグリグリ攻撃によって、ようやく目を覚ました。

「……………」

ひまわりはテンションが低い状態で朝食をとっていた。無理もないだろう……。朝からキツイものを食らったのだから……………。

「ひまわりどうした？やけに元気がないようだけど。」

一緒に朝食をとっていたひろしが尋ねてきた。今日は有休をとったため、会社は休みらしい。

「別に……………」

ひまわりはそれしか言わなかった。

「いやいや……………、何もなかったわけじゃないだろう……………。—
体何があったん……………」

「別に……………」

ひまわりは再びその一言で片付けてしまった。

（コイツ……………、数年前のS尻Eリカじゃあるまいし……………。）

ひろしはそう思いながら、朝食を一気に食べた。が……………、

「グフッ……………」

食べ物を喉に詰まらせてしまったらしい……………。

「あなた！！大丈夫！？」

みさえが慌ててひろしの背中を叩いた。しかし、それが逆効果だった……………。

「お前……………、背中強く叩きすぎだよ……………。痛い……………。」

「ごめんなさい、テヘツ」

みさえは茶目つ気たつぷりに言った。

「……………」

「……………」

ひまわりとひろしは何の反応も示さなかった。

「何か反応しないよ！！！！」

この状況に耐えきれずにみさえが言った。

「みさえ……………、いくら何でもそれはないぜ。なあ、ひまわり？」

「そうだよ母ちゃん、年考えなよ！！もうすぐ40だっけ？ダメだよそんなことしちゃ……………」。

ポカーン！ポカーン！ポカーン！ポカポカーン！！！！

「私はまだ34です！！！！」

みさえは怒って洗面所に行ってしまった。そこには、大量のゲンコツを食らったひまわりとひろしが倒れていたらしい……………。

「じゃあよろしく願います」

よしながに未だに気絶しているひまわりを渡したみさえは、軽やか

な声で言った。

「野原さん……………、ひまわりちゃんは一体……………」

よしながは、白目を向いているひまわりを見ながら言った。

「いえいえ、何でもありませんから」。ひまちゃん行ってらっしゃい。」

みさえはそう言うと、さつさと家の中に入って行ってしまった。よしながはひまわりを幼稚園バスの空いた席に座らせた。

「ひまわりちゃんが気絶してる……………」。

見たまんまのことを言ったのは、ひまわりの友人の一人である青山晶子という、幼稚園のアイドル的存在だった。

「どうせまた、オバちゃんにお仕置されたんだよ。あんまり気にしなくても大丈夫だよ。」

そう言うのは、ひまわりの赤ちゃん時代からの幼馴染みである本田ひとし。

「でも……………、何かかわいそう……………」。

そう言うのは、ふたば幼稚園一の秀才かつ気弱な、赤松洋介。

「ちょうどいいや、何かイタズラしてやろうかな、ヘッヘッヘッヘッ。」

そう言うのは、ふたば幼稚園二番目の問題児と言われる緑川大成。

「そうだった！いいものがあつたあつた……………」

大成はそう言いながら、ポケットティッシュから一枚取り出し、細く丸めた。そしてニヤつきながら、その先をひまわりの鼻の穴にいれ、くすぐった。

「フガッ！フガッ！フガッ！フガッ！」

始めた途端に、ひまわりが声を出しながら体をビクつかせた。しかし、相変わらず白目を向いたままだ。

「ヒヤヒヤヒヤヒヤ！！これは面白いや！！」

大成は調子に乗り、今度は両穴を攻め始めた。

「ちょっと、大成くん止めなよ。ひとしくんも何とか言つて。」

悪ふざけをする大成に注意をすると同時に、ひとしにも大成を止めるように促した晶子。しかし、

「大丈夫大丈夫。ひまわりちゃんならね」

ひとしはニヤリとしながら言った。実際ひとし自身、大成の攻撃を受けているひまわりの反応を見て楽しんでいたのである。

（ダメだこりゃ……………。）

晶子はそう思いながら、前を向いた。洋介はそんなことはお構いなしに眠っている。

「フガッフガッフガッ！！ハークッション！！！！」

とうとうひまわりがくしゃみわして目を覚ました。そして怖い目で周囲を見渡すと、視界に先がとがっているティッシュを持っている大成が目に入った。

「あんだね！！今までイタズラしてたのは！！」

ひまわりは大成に怒鳴った。

「いやそんなに怒るなよ。俺も悪気があったわけじゃ……………。」

「

「めちゃくちゃ悪気あつたでしょ……………」

そこで晶子が口を挟んだ。

「やっぱり！！人が気絶してるからって！！」

ひまわりは鋭い目付きで大成をにらみ付けた。普通の園児だったら、そこで謝るだろう。しかし、この緑川大成という園児は、属に言う普通の園児ではなかった……………。

「んな目でにらみ付けても、ちつとも怖くないわい！！」

「何ですって！？やる気！？」

「おうやってやるうじゃん！？」

二人の言い合いは次第にエスカレートとしていき、周りの園児たちもすっかり二人に釘づけになっていた。

「こらこら！二人ともケンカは止めなさい。」

ようやく気付いたよしながらが注意に来た。しかし……………、

「あんたは大体ね、女の子に対する態度がなってないのよ!!」

「女の子に対する態度がなってない!?!お前は女じゃないだろうが
!?!」

「何でそうなるの!?!」

結局ロゲンカは、幼稚園に着くまで続けられた。

(朝から頭が痛い………………。)

心の底からよしながはそう思ったようだ……………。

「つつか……………、あんなにケンカしていたのに……………、いつのまに……………」。

職員室から外を見たよしながが呟いた。彼女の視線の先には、先ほどまでケンカをしていたひまわりと大成が、晶子やひとり、洋介と共に走り回っていたのである。

「だから幼稚園児は面白いんじゃないの？」

突然松坂が話し掛けて来た。

「まあそうなんだけどね……………」。

よしながは無理矢理笑顔を作りながら言った。

「でもまさかね、しんちゃんの妹のひまわりちゃんまで受け持つなんてね。あなた相当野原さんに縁があるわよ。」

松坂がニヤリとしながら言った。するとよしながは、少しだけ微笑んで、

「そうかもね……………」。

と言い、窓から空を眺めた。

「あれから4年か……………」。

「そうね、4年ね……………」。

松坂もよしながの隣で空を見上げた。あの戦いから4年経った。彼女たち自身は参加しなかったが、春日部の町で恐怖を体験した。あれほどの体験は二度とないだろうかと、彼女たちは思っていた。しかし、そうはいかないのである……………。しんのすけたちの次は、その妹であるひまわりの仲良しグループが、あるとんでもない事件に巻き込まれるなんて、二人はまだ知る由もなかった……………。

あれから4年だゾ（後書き）

次回は、野原家にある訪問者が来る！？そして、しんのすけやのび太たちが登場するかも！！第二話、お楽しみに〜♪

そういうわけで、第二作もよろしく！！

オラたちの日常だゾ（前書き）

ひまわりはいつものように幼稚園に行った。さあ、しんのすけたちは生活は一体……。。

オラたちの日常だゾ

（後3分……………。）

しんのすけはそう思いながら時計を見つめていた。今日最後の授業だった。

（あゝあ……………、何かすごく退屈だゾ……………。この問題簡単すぎるし……………。）

しんのすけはそう思いながら、机の上にある算数の解答済みプリントを見た。

全て答えてあり、おそらく満点は間違いないだろう。しんのすけは見た目はお馬鹿に見えるのだが、幼稚園の頃から意外に賢かった。

そのためか、小学校に入学してからは、普通に授業で聞いただけで理解し、その上で勉強に興味を持つことが出来たため、みさえやひろしが予想出来なかったくらいに成績が良かった。

（暇だ……。暇過ぎるゾ……。）

しんのすけは前の席に座っているマサオとネネを見た。

（いつも二人はお隣の席だゾ。あんなにあいちゃんを好きだと言っていたマサオくんが、ネネちゃんと両思いになるなんて思わなかったゾ……。）

しんのすけは微笑んで二人を見ていた。次に視線をボーちゃんに移した。

（ボーちゃんも変わったゾ。鼻水を垂らさなくなったし、あんなにゆっくりだった口調がだいぶ速くなったゾ。まあ、普通の人よりはまだ遅いけど……。）しんのすけはそう思うと、また時計に視線を移した。

（後1分……。早くサッカーがやりたいゾ。）

しんのすけはそう思いながら時計を見つめていた。

〈放課後〉

「しんのすけ！！パスだ！！」

「ホイ！！」

しんのすけは河村の声に反応して右サイドにパスを出した。

「相変わらずナイスパスだな！！」

河村はそう言うと、しんのすけから受けたボールをそのまま持ち込んでドリブルし、六年生のサイドバックの選手を簡単に抜き去った。

「チータ！！セタリングだゾ！！」

「任せろ！！」

河村はそう言うと、しんのすけにゴール前にボールを蹴り上げた。ゴールキーパーがそれを捕ろうとしてジャンプした。しかし、

ズドン!!

それよりも早くしんのすけがボールを右足でゴールに叩き込んだ。

「わーい!! わーい!!」

「ハットトリックだしんのすけ!! やったじゃねえか!!」

抱き合うしんのすけと河村。それを悔しそうに眺める相手チームの選手たち。四年生相手にこんなにやられるとは、夢にも思っていなかっただろう。

「試合終了!!」

審判の声がグラウンドに響いた。

「二人ともすごかったわね」

「本当すごいよ!!」

二人が帰る支度をしていると、マサオとネネが話し掛けて来た。

「お前たちいたのか。」

河村は言った。

「うん、今日しんちゃんが練習試合あるって言ってたのよ。どうせ私たち暇だったし、二人のサッカーやってる姿を見るのも悪くないと思うて。」

ネネが言った。

「でも、相手の選手たち泣いてたよね。何かかわいそうだった。」

マサオが言った。

「それはそうだゾ。だって全員が六年生だったのに、オラたち四年生二人だけに5点も取られちゃ、悔しがらない方がおかしいゾ。」

しんのすけが言った。相手は春日部市内でも強いと言われていた。そのため、六年生で固めていたディフェンス陣は簡単に崩壊し、4点取られたのだが、しんのすけがハットトリック、河村が2点を奪ったために、金星をあげることが出来たのだった。

「まあ、これで俺たちもある程度市大会で戦えるっていうのは分かったな!!」

河村がニヤリとしながら言った。

「どうせやるなら優勝したいゾ!!」

しんのすけが力強く言った。

「僕たちはみんなを連れて応援に絶対行くよ！」

マサオが言った。

「みんなって？」

しんのすけが尋ねた。

「春日部防衛隊のみんなに決まってるじゃない。あとあいちゃんもね。」

ネネが言った。

「オーー！！風間くんとあいちゃんか、そう言えば最近会ってないゾ。」

しんのすけが言った。

「今は学校のテスト期間だから遊べないんだってさ。私立だから仕方ないのかもね。」

マサオが言った。

「もう暗くてなっちまうから帰ろっぜ！！」

「うん！！そうだね。」

河村の言葉に三人はうなずくと、みんなで学校を出て行った。

「あゝ疲れた、のび太助けてくれよ……………」。

ジャイアンはそう言いながら、隣で歩いているのび太に寄り掛かった。

「ジャイアン止めてくれよ。」

のび太はそう言うと、ジャイアンを自分の体から離れた。

「ジャイアンが疲れるなんて珍しいな……………。確かに今日の練習はヤバいくらいにキツかったかも……………」。

スネ夫が今日の練習の内容を思い返しながら言った。しかし、すぐにそれを首を横に振って断ち切る。

「スネ夫、監督がこんな練習を課すようになったのは新チームになつてからだよ。」

のび太が言った。

「そう言えばそうだな。何か先が思いやられるよ……………。怪我人が一気に増えたし……………」。

スネ夫はそう言うと、深くため息をついた。ハードな練習が原因で選手に疲労がたまり、結果怪我しやすくなってしまったようだ。

「それは仕方ないぜ……………。だってあんな負け方したらよ……………」

ジャイアンはそう言うと、夏の県大会を思い起こした。

「全国高校野球選手権埼玉県大会・準々決勝
市立ふたばVS春日部共栄

市立ふたば高校は、まだ開校して間もない学校だった。

そのため、強豪校がひしめく埼玉県の中から有望選手を引き抜くことは出来なかった。

そのため、初参加から8年連続で初戦敗退。最高成績は2回戦進出という成績だった。しかし、今年は入学してきたのび太とジャイアンがスタメンに入り、さらにスネ夫がスーパーサブとなったため、戦力がアップした。さらに選手たちが実力以上の力を発揮し、格上だった相手を次々に敗り、準々決勝まで勝ち上がって来たのだった。

《続きまして、後攻の市立ふたば高校のスターティングメンバーを

発表します。》

「いよいよだぜのび太……………」

「そうだね……………」

「何か不安……………」

三人は不安と期待を抱えていた。目の前にいるのは、県内屈指の強豪校だった。アルプススタンドにはランペツを持ったしずかが三人を見つめていた。春日部防衛隊とその家族たちも、グラウンドを見つめていた。

《5番・ファースト・剛田武くん・背番号3》

「ジャイアン!!!!」

しんのすけが大声を出した。ジャイアンは照れくさそうにそれに応えた。

《7番・ショート・野比のび太くん・背番号6》

「今日も頼むぜのび太。」

「はい!!」

サイドを守る三年生に言われ、のび太は元気良く返事をした。

《9番・セカンド・骨川スネ夫くん・背番号14》

スネ夫は毎試合途中出場をして、必ず結果を出したため、今回の大抜擢となったのだった。

「リラックスして行こうよ!!」

「そうそう!!リラックスだぜ!!」

のび太とジャイアンがスネ夫を励ました。

「分かってるさ!!」

スネ夫は照れくさそうに言った。

試合は大方の予想を覆す接戦となった。点を取られては返し、点を取ったら返される、壮絶な打撃戦となった。そして9回表、12対12で迎えた春日部共栄の攻撃。

カキーン!!

『打った!! グングン伸びていく……!! 入った!!
! 満塁ホームラン!! 満塁ホームランです!!』

「やれた……。」

ふたば高校の三年生エースがその場で崩れてしまった。

「先輩!! まだ試合は終わってませんよ!!」

ジャイアンが先輩に駆け寄って言った。

「……………」

しかし、先輩は何も答えてくれなかった……。その様子を見ていた監督が、主審にピッチャーの交代を告げた。

《ピッチャー、鈴木くに代わりまして、ファーストの剛田武くんが入ります。ファーストには、ピッチャーの鈴木くに代わり、佐藤くんが入ります。5番・ピッチャー・剛田武くん・背番号3、8番・ファースト・佐藤くん・背番号13、以上に代わります》

「頼むよジャイアン!!」

スネ夫が言った。

「任せよー!!」

ジャイアンは力強くそれに答えた。

その後、ジャイアンが連続三振を奪い、裏の攻撃に回った。しかし、早々と2アウトになり、スネ夫がバッターボックスに立った。しかし……………、

「ストライク!! バッターアウト!!」

こうして市立ふたば高校の快進撃は幕を閉じたのだった。春日部共栄はその後、優勝を果たし、甲子園で準決勝まで進んだのだった。

「あの負けで、監督は相当悔しかったんだろうな……。それと、これで優勝を狙いに行けるという自信もついたのかもしれない……」

ジャイアンは思い出すように言った。

「そのためにも、ジャイアンの活躍が必要なんだ。頼むよ、エース」

スネ夫が言った。

「当たり前だ！！俺たち都大会優勝メンバートリオにかかれば、夢じゃないぜ！！」

ジャイアンはそう言った。彼らは中学三年の中体連で、弱小チームを都大会優勝まで導いたという実績があった。関東大会はベスト4だったために、全国中体には行けなかったのだが……。

「頑張ろうぜ！！」

ジャイアンが二人に行った。

「うん！！」

のび太とスネ夫は頷いた。

彼らが埼玉の、しかも春日部の高校を選んだのには、理由があった。現に三人とも、都内の強豪校から勧誘されていた。ジャイアンに至っては、関西の強豪校からも勧誘されていた。しかし、彼らはそれらの高校に行かず、まだ歴史の浅い春日部の市立高校に通った。理由は至って簡単だった。春日部には、4年前に共に戦った、6歳も年下の仲間たちがいたからだった……………。

オラたちの日常だゾ（後書き）

よっ！！オラ野原しんのすけ10歳！！次回は風間トオルと酢乙女あいが本編初登場だゾ！！さらに、野原家に突然ドラミちゃんがやって来たゾ！！果たしてその理由とは何だろう？そこでドラミちゃんが父ちゃんと母ちゃんに向かって言った一言！！

『私！！しばらくここで暮らしたい！！』

はっやねやねっ、自分勝手にもほどがあるべ……………。

突然の訪問者だゾ（前書き）

センター試験終了に伴い、連載を再開するゾ。早速読めば？

突然の訪問者だゾ

「風間く〜ん!!」

「何？」

ここは私立カスカビアン小学校の4年A組の教室。酢乙女あいがクラスメイトの風間のもとに駆け寄って来た。

「あのさ、テスト明日には終わりますでしょ？今週の土日にしん様と河村くんのサッカーの試合があるってネネちゃんからメールが来たんだけど、よかつたら見に行きませんか？」

あいは風間の手を取りながら言った。学校のマドンナ的存在となっているあいに手をとられた風間は、周囲の男子からいらまれてしまった。風間はそれに気づき、あいの手を離すと、

「あ〜知ってるよ。昨日マサオくんから家に電話が来てね。もちろん見に行くつもりさ。全国大会につながる大事な大会なんでしょ？」

風間は当然のように言った。

「じゃあ決まりですわ!!後でネネちゃんに待ち合わせ場所を聞くので、分かり次第お知らせしますわ!!」

あいはニコリとしながらそう言うと、自分の席に戻って行った。

ジーーーーー

「………………。何だよ？」

風間は、ずっと自分を遠くからにらみ付けていた友人に言った。

「いいよな風間くんは、あいちゃんとお近付きでさ。」

その友人はそう言うと、むくれてしまった。

「そんなこと言われても………………。」

風間は困り果ててしまった。

（あいちゃんのせいでいつもこうだよ。最近友達が減ったのもきつとこのせいだ。トホホ………………。）

風間は心の中で涙を流した。

「日曜日」

「しんのすけ行けーーーー!!」

「河村くんファイトーーーー!!」

「お兄ちゃーーーーん!!」

昨日から行われている全国少年サッカー選手権大会埼玉県春日部市大会は、文字通り、全国につながる大会だった。しんのすけの所属するふたば小学校は、昨日の一回戦を、6対1で勝利を収め、二回戦に駒を進めていた。たった今、その二回戦が行われているところである。

ズドン!!

「やったゾーーーー!!!!」

しんのすけが、河村のクロスからヘディングで得点をあげた。

「みさえ、しんのすけがまたハットトリックだぞー！」

ひろしが興奮気味に言った。

「すごい、すごすぎる……………」

風間はしんのすけの活躍に驚きを隠せなかった。

「しん様……………」

あいがしんのすけに向かって手を振った。しんのすけは照れくさそうにそれに応えた。

「しんのすけ！！まだまだ点奪うぜー！」

河村がしんのすけに声をかけた。

「もちろんだゾー！」

しんのすけは力強く答えた。

「お前本当に格好良かったぜ!!」

野原家に着くなり、ひろしはしんのすけに言った。

「しんちゃんすごいわ。」

「お兄ちゃん最高!!」

みさえとひまわりもしんのすけを称えた。

「いやゝ、照れるなゝ」

しんのすけは頭をかきながら言った。結局あの後、しんのすけ自身は点を奪えなかったのだが、その代わりに河村が立て続けに3点を奪い、8対0の大勝で来週の三回戦に駒を進めたのだった。

「後何回勝てば優勝なんだ？」

ひろしはしんのすけに尋ねた。

「後4回だゾ。」

しんのすけはそう答えた。

「来週も頑張るのよ。」

みさえはしんのすけの頭をなでながら言った。

「オー——!!」

しんのすけは力強く答えた。まさに『平和』という言葉がふさわしい家族の光景だった。しかし……………、

ポン!!

突然階段の上に丸い穴が出来た。

「な、何だ!？」

ひろしは思わず声をあげた。すると、中から何かが出て来た。

「みさえさーん!!」

穴から出て来たものはそう叫ぶと、みさえに抱き付いてきた。

「えっ！？あなたは……………」

ドラミちゃんじゃないのー!!」

みさえはそう言つと、ドラミの顔をしっかりと確認した。

「オーーーーー!!ドラミちゃん!!お久しぶりだゾ!!」

しんのすけが言った。

「久しぶりね、しんちゃん」

ドラミはそう言つと、涙を流しながらも、ニコリとしてしんのすけを見た。

「お兄ちゃん、誰？」

ひまわりはドラミを指差しながら尋ねた。

「オラたちの友達だゾ！！未来から来たネコ型ロボットなんだゾ。」

しんのすけはそう答えた。

「未来から？」

ひまわりはそう言うと、首をかしげた。

「ところで、今回は何しに来たんだい？」

ひろしはドラミに尋ねた。すると、ドラミは顔を下に向けて、何も答えなかった。

「一体何の用なの？」

今度はみさえが優しく尋ねた。すると、ドラミは一度深い深呼吸をして……………、

「私!!しばらくここで暮らしたい!!」

と大声で言った。

「はい？」

ひろしとみさえは声をそろえて言った。ドラミの言った意味が全く理解出来なかったようだ。

「一体どういうことだか、説明してもらえないかな?いきなりそんなこと言われても……………」

ひろしはそう言うと、ドラミを食卓へ案内した。

「ねえ、一体どういうことなの？」

居間に座るなり、みさえはドラミに尋ねた。

「それは……………」。

ドラミは言葉に詰まった。

「何か言い辛いことなのかな？」

今度はひろしが尋ねた。

「え、ええ……………」。

ドラミはそれしか言わなかった。

「まあ……………、分かったわ。あなたたちに随分助けられたお礼をまだしていなかったし、せっかくこうしてまた会えたんだし……………
……………、ゆっくりして行ってね」

みさえはニコリとしながら言った。

「そうだな！！よし！！今日はドラミちゃんの歓迎会を、しんのすけの祝勝会を並行してやるか！！」

ひろしが力強く言った。

「よろしくね、ドラミちゃん」

しんのすけはそう言うと、ドラミに握手を求めた。

「私もよろしくー!」

ひまわりも握手を求めた。

「うんー!よろしくね」

ドラミはそう言うと、2人の手を握った。

「ドラミーーーーーー!」

突然、居間に穴が現われると、中からドラミを呼ぶ声が聞こえた。

「えっ!?!今度は何よ?」

ひまわりはわけが分からない様子だった。

「この声は……」

しんのすけは覚えていた。この声の持ち主を。

「もしかして……………」。

みさえとひろしはそう言いながら、穴を見つめていた。ドラミはと
いつと……………」、

「ドラミちゃん、何かすごい汗が出てるゾ。」

「えっ！？あらそう？。」

何やら慌てている様子。そんな中、声の持ち主は穴から出て来て、
野原家に着陸した。

「ふゝ懐かしいぜ!」

そう言つと、ドラミに駆け寄り、

「どうせお前のことだから、ここに来ると思ったよ!」

と言つた。

「オー!キッド!お久しぶりー!」

しんのすけはそう言つと、キッドに抱き付いた。

「久しぶりだなしんのすけ。随分と大きくなつたな。ここは西暦2011年だっけ?そうかそうか、お前はもう10歳なんだな。」

キッドはそう言いながら、しんのすけの頭をなでた。

「母ちゃん、誰?」

ひまわりはキッドを指差しながら言つた。

「ドラ・ザ・キッドと言つて、22世紀のネコ型ロボットよ。ドラミちゃんも、ひまが1歳の時に会ってるんだけど……。覚えてるわけないわよね?」

みさえはそう答えた。

「ところで、一体どうして君たちはここに来たんだ？」

ひろしが話を元に戻すために、ドラミとキッドに尋ねた。

「あゝそつだそつだ！！そつだつた！！いや、実はですね、コイツが勝手に家を出て行ったんですよ！！そこでここに来てみたというところです。」

キッドはドラミを指差しながら答えた。すると、ドラミは自分を指差しているキッドの腕を思いっきり上から叩いた。

バシッ！！

「痛えーーーー！！てめえ何しやがんだよ！！」

キッドは腕をさすりながら言った。

「人を指差すなんて最低よ！！」

ドラミはそつ怒鳴った。

（いや、人じゃなくてロボットだゾ………………。）

しんのすけは心の中でそう思った。

「大体な、どら焼きにケチャップとマスタードかけたくらいで、そんなに怒ることあねえだろう!!」

「あんな気持ち悪いもん食べられないわよ!!」

「はい?」

ひろしとみさえ、それからしんのすけとひまわりまでもがそう言った。

「じゃあ……………、ドラミちゃんはそんな理由でここで暮らすって言ったの?」

ひろしはみさえに尋ねた。すると、ドラミは怖い顔でひろしをにらみ付け、

「私にとってはそんなことでは済まされないんです!!さっき暮ら

していいっていいましたよね！？今さら取り消せませんよ。」

「……………」。

ひろしは何も言えなくなってしまった。みさえたちも呆れた様子でキッドとドラミの口ゲンカを聞いていた。

「おいお前！！野原さんに迷惑かかるからとつとと帰るぞ！！」

「いやよ！！キッドがあんなどら焼きの食べ方をやめるまで、絶対帰らないもん！！」

「この頑固女！！」

「何よ！！高い所が怖い弱虫男！！」

「何だとー！！？」

「何よー！！？」

結局、2人の口ゲンカは、この後2時間続いた。

（キッド……………、迷惑だからドラミちゃんを連れて帰るってのは分かるけど、結局2人でオラたちに迷惑かけてるゾ……………。）

しんのすけはそう心の中で思うと、

「やれやれ……………」。

と、ひまわりと一緒に呟いた。

突然の訪問者だゾ（後書き）

私、野原ひまわり、5歳。今回は、ロゲンカが終わったキッドとドラミちゃんを交えて話し合うのよ！そこでドラミちゃんがある驚くべき提案をするんだけど……。そこで、ドラミちゃんが私に言った一言！！

「ひまわりちゃん、あなた未来に興味ない？」

さあ、ドラミちゃんは一体何を企んでいるのかしら？次回もお楽しみに♪絶対読んでね♪読んでくれないと、私が母ちゃんに怒られるから……………。

「ひまわり……絶対読ませるのよ……さもないと……」

うわ………母ちゃん既に起こってる。

ドラミちゃんの提案だゾ（前書き）

キッドとドラミのけんかが持ち越されてしまった。迷惑がっているしんのすけたち。果たしてどういう展開に？この後すぐ！！

ドラミちゃんの提案だゾ

「おいおい、2人ともいい加減にしろよ。」

ひろしは互いにそっぽを向いているキッドとドラミに言った。

「そうよ、あなたがそうしているせいで、私たちがすごく迷惑しているのよ。」

みさえはそう言うと、ため息をついた。すると2人は顔を見合わせた。しかし、

「フン！ー！！」

と言って再びそっぽを向いた。

「キッド、いい加減に帰ったら？」

ドラミが言った。

「はあ？俺はお前を連れて行かないや帰れないんだよ！！」

「どうしてよ！？」

「ドラえもんに言われたんだよ。『もしドラミを連れて帰って来れなかったら、高い所に宙吊りにする。』って……………」

キッドはそう言つと、身震いをした。高い所は、キッドにとってはまさに地獄。なかなか未来に帰らないのもうなずけた。

「いいんじゃない？そうしてもらえば、高所恐怖症が治るかもよ」

ドラミがニヤリとしながら言った。

「馬鹿野郎！！んなこと出来るわけねえだろう。」

キッドはそう叫んだ。

「母ちゃん、父ちゃん、もう2人は放つて置こうよ。オラ腹減った……………」

しんのすけはそう言いながら、間もなく夜の7時を指す時計を指差した。

「うーん……………、それもそうだな……………、いつまでかかるかわからないし……………。よし、じゃあテーブルで飯にしよう。」

ひろしが言った。

「じゃあ早速準備するわね。」

みさえはそう言つと、台所に向かって行つた。

「さてと、俺は2階に行くぜ。」

ひろしは2階に上がって行つた。

「お兄ちゃんはどうするの?」

ひまわりはしんのすけに尋ねた。

「オラ? うーん、ご飯ができるまで2人を観察するゾ。」

しんのすけはそう答えた。

「どうして?」

ひまわりは尋ねた。

「そりゃあ、面白いからだゾ。」

しんのすけはそう言つと、ニヤニヤしながらそっぽを向いている2人を観察した。

「じゃあ私も」

ひまわりも兄と同じ行動を取ることにした。

「おいおい……………、お前たち何時までやっているんだよ？」

夜の10時になった。未だに2人の状況は変わらず。

「キッドが帰るまでこのままですから。」

「ドラミが帰ると言うまで、このままです。」

「はぁ……………、もう勝手にやっててくれよ。俺たちは先に寝るぜ。」

ひろしはそう言つと、隣の寝室に行った。

「そういうわけだから、2人ともお休みなさい。」

みさえも寝室に行った。しかし、しんのすけとひまわりは、寝室に向かおうとしなかった。

「2人とも、いい加減にしてよね。せっかく試合に勝って気分良く帰って来たのに、2人のせいで台無しだゾ。」

しんのすけがキツイ口調で言った。すると、キッドとドラミはそろってしんのすけの方を向いた。

「大体、2人がやってることは、近所のヨシリンとミッチーがやってることと同じだゾ。」

しんのすけは、未だに事あることに野原家にズカズカと入り込んでいるバカ夫婦を引き合いに出して言った。

「誰だそれ？ドラミ知ってるか？」

「知らないわよ。」

「ちゃっかり2人で会話してるし。」

ひまわりがニヤニヤしながら言った。すると、キッドとドラミは顔を赤らめた。

「素直になれば？オラには分かるゾ。仲直りしたいってこと。オラ

がまだ幼稚園児だった時、2人で抱き合っていたじゃん。そのくらい好きなんでしょ?」

しんのすけは4年前の出来事を言った。

『キッド――――！！！！』

『ドラミ――！！！！』

『会いたかったよ。』

『俺もだ！！』

「キッドたちがドラえもんのアジトから生きて帰って来た時、2人

抱き合っただじゃん。そのくらいお互いに好きで、心が一つだったんだゾ。だから、どら焼きくらいでそれが壊れるっていうことはないはずだゾ。」

「う……………」

2人は何も言い返すことが出来なかった。あの時2人は二度と会えないことを覚悟していた。しかし2人は再び会えた。それで今は、2人で暮らしている。抱き合った時のことを忘れたことはなかった。あれが2人の絆を更に深めることになったのだから……………。

「お兄ちゃん、珍しくいいこと言うじゃん!!」

ひまわりがしんのすけに言った。

「いやゝ、それほどでもゝて、違う違う。いい加減に仲直りしたら?一緒になれたことに感謝してさゝ」

しんのすけはニコリとしながら言った。

「そうね……………、確かにしんちゃんの言つとおりだわ……………」

「そうだな……………、危つく忘れるところだったぜ……………」

2人はそう言つと、顔を見合わせた。

「ごめんねキッド、たかがどら焼きのことで怒るなんて、私バカよね？」

「いや、俺の方こそ悪かったよ。お前のことをちつとも考えてなかった。これからは気をつけるよ。」

ドラミとキッドは互いに謝罪した。しんのすけとひまわりはそれをホッとした様子で見守っていた。キッドはしんのすけの方を見て言った。

「ありがとな、しんのすけ。またお前に助けられたぜ。何かお礼をしないとな。な？ドラミ。」

「そうね。しんちゃん、お礼は何がいい？」

ドラミはしんのすけに尋ねた。しんのすけをしばらく考え込んだ。そして、

「オラは別にいいゾ。オラじゃなくて、ひまに何かをしてあげてよ。」

しんのすけはそう言つと、ひまわりの方を向いて、

「ひま、何をしてほしい？」

と、尋ねた。

「えっ！？いきなりそんなこと言われたって……………」

ひまわりは困った表情をした。すると、ドラミがある提案をした。

「ひまわりちゃん、あなた未来に興味がない？」

「未来？」

ひまわりは、ドラミの言った意味が分からなかった。

「あなたに未来旅行をプレゼントしようと思うの。」

「未来旅行！？」

ひまわりは驚いた。そんなもの、彼女の5年の人生の中で、一度たりとも出て来なかった言葉である。

「そう、未来旅行よ♪あなたをタイムマシンで色んな時代に連れて行くのよ。あなたの希望次第なら、過去に行ってもいいわよ♪」

ドラミはニコリとしながら言った。ひまわりは、その夢のある話にあっさり食いついた。

「行きたい！！私、未来旅行に行きたい！！」

ひまわりはしんのすけの方を見て言った。

「ひま、オラが許しても、父ちゃんと母ちゃんが許すかどうかまだ分からないゾ。明日の朝聞いてみるゾ。」

しんのすけはそう言つと、ドラミとキッドの方を向き、

「2人も今日はここで寝てよ。明日母ちゃんと父ちゃんに話をして。」

と言つた。

「分かつたわ。」

「任せておけ。」

2人はそろつて言つた。

「じゃあ、オラたちは寝るゾ。幼稚園と小学校があるし。ひま、寝るゾ。」

「うん。おやすみなさい!!」

しんのすけとひまわりは寝室に向かつた。

「じゃあ俺たちはここで寝るか?」

「そうね。」

キッドとドラミはそう言つと、その場でぐっすりと眠ってしまった。

「未来旅行？」

ひろしとみさえは口をそろえて言った。

「そうです。しんのすけたちが俺たちを仲直りさせてくれたお礼に
と思ったんだけど……………」

キッドは頭をかきながら言った。

「うーん、まだ夏休みだったら良かったんだがな。ひまわりは幼稚園があるし……………」

ひろしは言った。

「えー！？」

ひまわりは不満の声をあげた。

「ひま、夏休みにしてもらいなさい。」

みさえが言った。

「ヤダヤダ!! 今行きたいの!!」

ひまわりは駄々をこねた。

「ひま、我慢するんだゾ。」

しんのすけがひまをなだめようとした。しかし、

「私、お兄ちゃんみたいにお利口じゃないもん。」

と、ひまわりは言い、むくれてしまった。

「野原さん、だったらタイムマシンでこの時間に戻って来ればいいじゃないですか。」

キッドが言った。その言葉にしんのすけたち3人はハツとした。

「あつ……………、そうか。」

「そういうこと、普通に出来たのよね。」

「すっかり忘れてたゾ。」

3人はそう言うと、そつぽを向いているひまわりを見た。

「ひま、行っでいいわよ。」

みさえがニコリとしながら言った。

「えっ！？本当にいいの！？」

ひまわりは尋ねた。

「楽しんで来いよ！！」

ひろしが言った。

「わーい！！わーい！！やったやったー！！」

ひまわりは大喜びをした。

「でもひま、ひまだけが行ってもつまらないんじゃない？誰かを一緒に連れて行けば？幼稚園の友だちとか。」

しんのすけはひまわりに提案した。

「それいい考えね、今日幼稚園に行っで、何人が誘っでみれば？ひとしくんとか晶子ちゃんとか、いつも遊んでる友だちいるでしょ？」

みさえは言った。

「うん！！じゃあ幼稚園で誘う！！」

ひまわりは大きな声で言った。

「じゃあ出発は今日の夕方な！！ひまわり、がつつりと友だちを誘うんだぜ！」

キッドがニヤリとしながら言った。

「うん！！」

ひまわりは元気良くうなずいた。

「行つてきまーす！！」

ひまわりはバスに乗って幼稚園に向かって行った。

「じゃあオラも行って来るゾ！！今日は練習ないから、早く帰って来るゾ。」

「行ってらっしゃい♪しんのすけ。」

「しっかり勉強しろよ！」

「後でね、しんちゃん♪」

みさえ、キッド、ひまわりは、2人を見送った。

「行って来る！！電車に乗り遅れちまう！！！」

ひろしはそう言いながら走って行った。

「さてと、家事をやらなきゃ！！！」

みさえは家の中に入って行った。

「みさえさん、私たちも手伝うわ♪」

ドラミが言った。

「あら、本当？嬉しいわ。じゃ〜ね〜………………。」「

ひまわりの冒険がいよいよ始まる。

ドラミちゃんの提案だゾ（後書き）

よっ！？オラ野原しんのすけ10歳！！ひまわりが未来旅行に友達を誘うんだけど、やっぱり一筋縄では行かないみたいだゾ。特に大成くんとひとしくね……。ここでひまわりが2人放ったこの一言ー！

「私はイケメンにしか興味がないのー！」

は……、ひまわりのイケメン好きは赤ちゃんの時から全く変わってないゾ……。いや、むしろひどくなってるかも……。やれやれ……。

じゃ……次回も見ろんだゾ……！

未来旅行にお誘いするゾ（前書き）

ひまが幼稚園のお友達をお誘いするんだけど……………。

未来旅行にお誘いするゾ

くふたば幼稚園く

「洋介くん！！洋介くん！！」

ひまわりは、教室で本を読んでいる赤松洋介に声をかけた。

「何？」

洋介はかつての風間トオルのように、秀才である。しかし、性格は泣き虫だった頃のマサオそのもので、気が弱かった。

「洋介くんをねく、あるイベントに誘おうと思ってね……………」

ひまわりはそう言うと、ニターッと笑った。

「うつ……………」

洋介は、そんなひまわりの笑顔に、なぜか不安を覚えた。

「何よく、まだ何も言っていないのに、そんな顔することはないでしょう。」

ひまわりは、不安そうな顔をする洋介に、不快感を覚えた。

「それで、話って何なの？」

洋介は尋ねた。

「あつ！そうそう、これはね、とってもすごい話なのよ。」

ひまわりは笑顔で言った。

「ひまわりちゃん！そのすごい話、私にも聞かせてー！！」

そう言いながら、ふたば幼稚園のアイドル、青山晶子が2人に駆け寄って来た。

「晶子ちゃん。ちょうどよかった。晶子ちゃんにも話すつもりだったから。」

ひまわりはそう言つと、周りの園児に聞こえないように、2人を近付けさせた。

「いい？この話は絶対他の人に言っちゃダメよ。」

「うん。」

ひまわりの言葉に、2人はうなずいた。

「幼稚園が終わったらさ、旅行に出かけない？」

「旅行!？」

2人は一斉に叫んだ。

「しっ!! 静かにしてよ。」

「旅行って、一体どこに行くのよ?」

晶子が尋ねた。

「未来よ。」

ひまわりはそう答えた。

「今何て言ったの？」

洋介が目を点にしながら尋ねた。

「だから未来に行くのよ。タイムマシンで。」

ひまわりはそう答えた。

「えーーーーっ!？」

2人はやはり驚きの声をあげた。

「未来に旅行って……………、そんなこと出来るわけないよ。非現実的過ぎるよ。」

洋介が言った。

「そうよ、タイムマシンなんて、あるわけないじゃない……。」「

晶子が呆れたという感じで言った。

「本当よ。その証拠に。」「

ひまわりはそう言うと、指をパチンとならした。すると、突然教室の壁に穴ができ、中からキッドが出て来た。

「よっ！！」

キッドは洋介と晶子に言った。2人は一体何が起こったのか分からず、その場で固まっていた。幸い、教室にいたのは、ひまわりたち3人だけだったので、他の園児には気付かれなかった。

「キッド、もうちょっと派手に登場してよ。インパルスがないじゃないの。」「

ひまわりが不満そうに言った。

「それを言うならインパクトだろうが。注文うるせーぞ。」「

キッドはそう言い返した。

「ふん、高い所が恐いくせに。」「

ひまわりがニヤリとしながら言った。すると、キッドの顔は赤くなり、

「うるせー!!どうせお前に俺の気持ち分からねえだろ!？」

「分かりたくもないわよ。高い所が怖いなんて、アメリカのトリュフが聞いて呆れるというか。」

「トリュフ!?それを言うならシェリフ!!保安官という意味だよ!!」
「まったく、兄のしんのすけもすごかったが、妹のお前はそれ以上だな!!」

「へっ!!キッドなんかに言われたくないわよ。」

「んだとクソガキ!!」

「幼稚園児にそんな言葉使っちゃいけないんだよ」

「お前にはナンボでも使ってやるよ!!」

「あの、キッドさん……………、あなたは一体……………」

晶子は、ひまわりと激しく言い合っているキッドに尋ねた。洋介はというと、2人のロゲンカは恐くて、半泣き状態だった。

「ああ悪い悪い、俺の名前はドラ・ザ・キッドだ。22世紀のネコ型ロボットなんだぜ。」

「あなたがロボット？」

晶子は首をかしげた。

「その証拠に、ほら。」

キッドはそう言うつと、腹を開けて体の内部を見せた。当然、機械が詰まっている。

「本当だ……………」

洋介が目を丸くしながら言った。

「これで信じてくれたか？さっきこのクソガキがお前たちに話していたことは本当なんだぜ。出発は今日の夕方。帰って来るのは、出発してから1時間後だ。」

キッドはそう説明した。

「たった1時間！？それでは旅行にならないじゃないですか。」

洋介がごもつともな意見を言った。

「あゝ悪い悪い、言い忘れてたな。未来の世界で何日か過ごして、タイムマシンでさつき言った時間に帰るんだ。そうすれば、お前たちの母ちゃんは、ただ遊びに行つて帰つて来たぐらいにしか思わねえだろ?」

キッドは分かりやすく説明した。

「なるほど……………」

「そんなことが出来るのね……………」

2人は感心しながら言った。

「信じてくれたか?」

キッドは2人に尋ねた。すると、2人は笑顔で、

「はい!!」

と、答えた。

「よっしゃ、これでこの2人は参加決定だな。あつ、手ぶらで来いよ。全部こつちで準備するから。」

「わーい!!わーい!!」

晶子で洋介は喜んだ。

「ひまわり、誘うのはこの2人だけでいいのか？」

キッドはひまわりに尋ねた。

「あと2人誘うつもりなんだけど……………」

ひまわりは言った。

「そうか、いいぜ。まあ、それ以上は面倒見切れないがな。」

キッドは言った。

「ところで、お前が誘いたいヤツって、一体誰なんだ？」

キッドはひまわりに尋ねた。

「えっ？それはね……………」

「おーい！！みんな何やってるんだー？」

突然教室に2人の男子が入って来た。

「あの2人よ……………」

ひまわりは、教室に入って来た2人を指差した。

「ん？ひまわり、隣にあるタヌキみたいなの、一体何だ？」

幼稚園第2の問題児、緑川大成はひまわりの横にいるキッドを指差

しながら尋ねた。すると、キッドはタヌキという言葉が気に入らなかったらしく、

「俺はタヌキじゃねえよ！！22世紀のネコ型ロボットだよ！！」

と、怒鳴った。

「はぁ！？それマジかよ！？」

大成はそう叫びと、ものすごい速さでキッドの側に駆け寄った。そして、舐めるようにキッドを体を見た。

「これがロボットかよ。おいひとし！！お前も見てみるよ！！」

大成はそう言うと、野原みさえの友人である本田ケイ子の一人息子、本田ひとしを無理矢理引っ張った。

「す、すごい……………」

ひとしもキッドの体に感嘆の声をあげた。

「あつ、2人にいい話があるのよ。」

ひまわりがひとしと大成に言った。

「何？」

「何だよ？」

2人は尋ねた。

「詳しくはキッドからね。」

ひまわりがそう言うと、キッドが口を開いた。

「お前たちを未来旅行に連れて行きたいんだが……………」

「行く！！行く行く行く！！！！」

キッドの言葉を最後まで聞かずに、大成が即答した。

「じゃあ僕も行くよ。」

ひとしも答えた。

「そ、そうか……………。それは良かったぜ……………。ああ、俺の名前はドラ・ザ・キッドだ。キッドと読んでくれ。」

キッドはそう言うと、ひとしと大成に握手を求めた。2人は笑顔でそれに応じた。そして、大成はキッドの耳元で、

「なあキッドさん。ひまわりのヤツどう思う？」

と、尋ねた。

「まあ、生意気なクソガキってところだな。」

キッドはひまわりにも聞こえる声で言った。

「キッド、聞こえてるわよ。」

ひまわりはキッドをにらみ付けた。

「ひまわり、そう怒るなって、本当のことなんだから」

大成はそう言うと、今度はキッドに、

「アイツは、宝石や、イケメンが大好きなんだぜ。しかも、宝石が載っている広告まで集めてやんの。」

と、笑いをこらえながら言った。

「何よ！！何か文句でもあんの！？」

ひまわりは大成に怒鳴った。

「別にねえよ！！ただ面白いだけ」

大成はニヤリとしながら言った。

「ひまわりちゃん、それは幼稚園児らしくないって。大体イケメンなんて簡単に捕まえられないよ。もう少し現実を見ないと」

ひとしは幼稚園児らしからぬ発言をした。

「私はイケメンにしか興味はないの！！」

ひまわりはそう叫んだ。

「ひまわりちゃん……………、それじゃあいつまで経っても結婚で

きないよ」

ひとしがからかうような口調で言った。

「何ですって!？」

「おお、怒った怒った。」

更に大成があおる。

「2人とも!!絶対許さない!!待て————!!」

「追いつけるものなら追いついてみろってんだ!!行くぞひとし!」

「うん!!」

「待て————!!」

3人は教室から出て行き、追いかけてここを始めてしまった。残されたキッド、晶子、洋介の3人は、啞然としながら3人を見送った。

「なあ、あいつらっていつもああなのか？」

キッドは2人に尋ねた。

「はい、毎日あんな感じです。」

晶子が答えた。

「僕たちはあの3人にいつもかき回されていますから……………、タハハハ……………」

洋介が言った。それを聞いたキッドは、テンションが低くなった。

（おいおい……………、これから数日間、ずっとコイツらの面倒を見続けるのかよ……………。横にいる2人はいいいとしても、あの3人は……………。これは大変な重労働になりそうだぜ……………。）

キッドはそう思うと、

「ハア……………」

と、深いため息をつき、その場に崩れ落ちた。

「キッドさん!?!」

「キッドさん!?!しっかりしてください!?!一体どうしたんのよ!?!」

洋介と晶子は、これから課されるであろう重労働に憂うつになったキッドに必死で呼び掛けた。しかし、キッドは何も答えなかった。

（勘弁してくれ……………。）

キッドはそう思った。一方、あの3人は……………、

「待て―――!!」

「誰か待つかよ!!」

「そうだそうだ!!」

キッドの様子なんか当然知るわけもなく、相変わらずのんきに追いかけてっことをやっていた。

未来旅行にお誘いするゾ（後書き）

ようー！ドラ・ザ・キッドだぜい！！とりあえず未来旅行に行くメンバーは決まったんだが、赤松洋介と青山晶子以外の3人が、半端なくヤンチャで困ったもんだ。これからのことを考えるだけで憂うつになるぜ……。次回はいいよ未来旅行に出発だ！！絶対読んでもくれよ！！

感想ドシドシ送ってね♪待ってるゾー！！！！

未来旅行へ出発だゾ（前書き）

いよいよ未来旅行へ出発だゾ！！この後すぐ！！絶対読むんだゾ！！

未来旅行へ出発だゾ

「えっ！？ひまわりちゃんたちが未来旅行に！？」

ふたば小学校の昼休みの教室で、マサオが驚きの声をあげた。

「そうなんだよね。オラも行きたいけど、まだまだ試合が続くからな〜。」

しんのすけはそう言うと、ため息をついた。

「未来旅行か〜………………。何かひまわりちゃんたちがうらやましいわね。」

ネネが言った。

「僕たちも行ってみたい。」

ボーちゃんが続いた。しかし、しんのすけの表情は明るいネネたちの表情と正反対だった。

「しんちゃん、どうしたの？そんなに怖い顔をして。」

マサオが尋ねた。

「オラさ、ひまわりたちが心配なんだゾ。オラたちが幼稚園の時、あんなことあったじゃん。未来の世界には、今の世界よりも悪い奴がいっぱいいて、その分危険が多いような気がするんだ。まあ、キツドたちに任せれば大丈夫だと思うけど、それでも心配で……………。」

「

しんのすけはそう言うのと、ゆっくりと席を立った。

「しんちゃん!？」

3人はそろってしんのすけの名前を呼んだ。しんのすけはそれにも返事をせず、ただ窓から空を眺めていた。

「しんちゃんさ、よく空ばかり見てるよね？」

マサオが小声でネネとボーちゃんに言った。

「そうね、一体どうしてなのかしら？」

ネネは首をかしげた。

「分からなくてもいい。」

「えっ!？」

ボーちゃんの言葉に、2人は声をあげた。

「しんちゃんだけが分かってくればいい。無理に知ろうとする必要はない。」

ボーちゃんはそう言った。2人はその言葉を聞くと、

「そうね、別に知る必要なんてないわよね。」

「うん!ボーちゃんの言うとおりだよ!！」

3人がそんな会話をしている中、しんのすけは、ただじっと、空を眺めていた。

（お又のおじさん……………、いや……………、又兵衛さん……………、ひまわりを天国から見守ってください。オラがひまに出来ることと言ったら、これくらいしかないから……………。）

しんのすけはそう思いながら空を見つめていた。

数々の冒険の中で、春日部防衛隊や河村に言っていなかったこと、いや、絶対言わないと誓ったこと……………、それは、戦国時代に行つて、又兵衛という人物に会い、一緒に戦い、彼が命を落とす間際にしんのすけに刀を渡したことだった。その刀は、今は野原家の家宝として、新しく作った神棚に置かれている。4年前にドラパンがしんのすけに渡した黒い剣も横に並べてあった。しんのすけが空を眺めるようになったのは、それからだった。そして現在、2011年に至る……………。

（又兵衛さん……………。頼んだゾ……………。）

しんのすけは心の中で強く叫んだ。

「夕方、野原家」

「よし、どうやら全員集まったみたいだな。」

そう言うキッドの目の前には、ひまわり、ひとし、晶子、大成、洋介の姿があった。キッドの横には、小学校から急いで帰って来たしんのすけ、ひまわりたちを見送りに来た春日部防衛隊のメンバーがいた。当然、この中には河村やすおと酢乙女あいも含まれている。

「どうして風間くんまで来れたの？」

マサオは風間に尋ねた。

「ネネちゃんがいちゃんに携帯メールで知らせてくれたんだよ。だから僕も知って、ここに飛んで来たというわけ。」

「そうだったんだ……。」

マサオはそう言うのと、ネネの方を見た。ネネは、あいと何か楽しそうにしゃべっていた。

「あの2人、本当に仲良くなったよね。」

マサオが言った。

「そうだね、あいちゃんがふたば幼稚園に来た時のこと覚えてる？僕たち2人であいちゃんを巡って対決したこと。」

風間がマサオに尋ねた。

「あ、あつたあつた！あれでネネちゃんがいちちゃんを嫌うようになったんだよね。まあ、あの時のあいちゃんのキャラからしたら、ネネちゃんが嫌うのも時間の問題だっただろうけど。」

マサオが言った。

「そうだったね。」

風間がなつかしむように言った。そして、

「もう僕たちも10歳なんだよね。しんのすけの妹のひまわりちゃんも、もうあの時の僕たちと同じ歳なんだ。時間が過ぎるのって、早いな……。」

と、続けた。

「おいおい風間、オヤジみたいなこと言ってんじゃないよ。」

後ろから河村が割り込んで来た。

「そうだね。ハハハハハハハハ。」

風間は笑った。私立の小学校には、親友と呼べるほどの友達はいなかった。そのため、学校で心の底から笑えたことがなかった。そういう風に笑えるのは、しんのすけたちと一緒にいる時だけだった。

（やっぱり、しんのすけたちと一緒にいた方が、本当の僕らしくていいや！……よし……。）

風間はある決心をした。

「準備はいい？みんな出発するわよ！！」

ドラミがタイムマシンに乗り込みながら言った。ひまわりたちも、次々にタイムマシンに乗り込んで行った。

「ひまわり、ドラミちゃんやキッドくんに迷惑かけちゃダメよ。」

みさえはタイムマシンに乗り込んだひまわりに言った。

「分かってるよーだ！」

ひまわりがいつものようにおどけてみせる。

「じゃあ2人とも、この子たちを頼んだ。」

ひろしはドラミとキッドに言った。

「任せてください!!」

キッドが力強く言った。ドラミはただこくりとうなずいた。

「ひま、帰って来たら、夕食の時に旅行のことを話すんだゾ。それから……。」

しんのすけは言葉が詰まった。

「それから、何？」

ひまわりは尋ねた。

「いや、別に何でもないゾ。楽しんで来るんだゾ。」

しんのすけは無理矢理笑顔を作りながら言った。

「うん!!」

ひまわりはうなずいた。

「ひまわりちゃん!!」

突然、風間が話しかけた。

「な、何？」

ひまわりは風間に尋ねた。すると、風間はひまわりのもとに駆け寄り、何かを手渡した。

「こ、これは……………」

「御守りだよ。楽しく無事に旅行が出来るようにって、神社で買ってきたんだ。これで大丈夫さ。」

風間はニコリとしながら言った。

「あ、あ、あ、ありがとう……………」

ひまわりはそう言うと、顔を赤くした。それを横から見ていた大成は、ひまわりを軽く小突き、

「顔が赤くなってるぜ。もしかしてお前……………」

と、ニヤリとしながら言った。すると、ひまわりは首を横に何度も振り、

「何言ってるのよ！！勘違いしないでよ！！」

と、怒鳴った。

「はっはっん……………、ムキになるところがますます怪しい」

今度はひとしが言った。

「何よあんだまで!!」

「おいおい騒ぐなよ。そろそろ出発するぜ。」

キッドが割って入ったため、その場は何とか収まった。ひまわりはチラリと風間の方を見た。それに気付いた風間と目が合った。すると、ひまわりは目をそらし、また顔が赤くなってしまった。それを横で楽しそうに2人の男子が見ていた。

「準備はいいか!?!よし!!出発だ!!」

キッドはそう言うと、タイムマシンを起動させた。タイムマシンは空中に浮かんだ。

「じゃあまたね、父ちゃん、母ちゃん、お兄ちゃん。」

ひまわりがそう言つと同時にタイムマシンは消えた。

「行っちゃった……。」

風間はそう呟いた。そこへ、

「風間くん」

しんのすけが突然後ろから話しかけた。

「な、何だよ？」

風間は怪訝そうに尋ねた。

「ひま、顔が相当赤くなつてたゾ。風間くんがひまに御守りを渡した時。」

「そ、それがどうしたんだよ？」

風間は尋ねた。

「別に」。ただ、オラの弟になるのはまだ認められないかな。って」

しんのすけは楽しそうに言った。風間はその言葉を聞いた途端に、顔を真っ赤にした。

「な、何言ってるんだよ！？そんなことあるわけないじゃないか！」

風間はそう叫んだ。誰から見ても動揺しているようにしか見えない。

「本当に？風間くんって、幼稚園の時からロリコン気味だったからさ、ちよっと心配だね。」

「僕はロリコンじゃない！！」

風間はそう叫んだ。

「あっ……………」

風間はようやく気が付いた。周りの冷ややかな視線が自分に向いていることに。

ボーン……………

風間は下を向いてうつむいてしまった。

「さてと、風間くんイジリはこのくらいにしておいて、今日は久しぶりに遊ぶゾ。」

しんのすけが言った。

「うん、そうしよう!」

「何して遊ぶ?」

「女の子も一緒に出来る遊びがいいわ」

「私にも出来る遊びがいいですわ」

「目茶苦茶面白い遊びなんかねえの?」

「みんな……、少しは僕のことを心配してくれよ……」。

7人が野原家にそろうのは本当に久し振りだった。しんのすけが3年生でサッカーを始めた時以来だった。河村は1年生の時から始めていたのだが……。

「じゃあね、これで遊ぼう!」

しんのすけはそう言うと、テレビの下にある棚から何かを取り出した。

「そ、それは、一番新しいウィニングイレブンじゃねえか!」

河村が叫んだ。

「買ってからまだ一度もやっていないんだゾ。暇がなくて……。
今日はみんなに楽しむゾ!」

「オー!」

こうして春日部防衛隊による、ウィニンググレイブン大会が始まった。その様子を、みさえとひろしは微笑みながら見ていた。

ここは時空間の中、ひまわりたちを乗せたタイムマシンが、移動している。

「まずは、22世紀の東京に行くぜ！このことを報告しねえといけねえ奴がいるからな。」

キッドがひまわりたちに言った。

「報告って何よ？」

ひまわりは尋ねた。

「私たちが仲直りしたことよ。」

キッドの代わりにドラミが答えた。

「??????」

ひまわりはわけが分からず、首をかしげた。そうしている間にも、タイムマシンは、22世紀東京へ、着実に向かっていった。

未来旅行へ出発だゾ（後書き）

僕、風間トオル、10歳。しんのすけのやつ、久々に話したと思ったら、僕のことをロリコン扱いして……。あゝム力つく!! えっ! ? そうやってム力ついているからますます怪しいだって? ちがう!! 僕は断じてロリコンなんかじゃないぞ!!

って!! 話がそれちゃったじゃないか。今回は、ひまわりちゃんたちが22世紀の東京に到着するんだけど、そこで誰かに会った。まあ、詳しくは言えないことだね。そこで、その人物(?) が言った一言、

「キッド、よかったね、高い所に宙吊りの刑にならなくて」

あゝ怖い怖い。以上風間トオルでした。次回も必ず読んでね！！感想もドシドシ送ってくださいーい！！何度も言うけど、僕はロリコンじゃないからねー！！

ドラミちゃんの家に行くゾ（前書き）

今月最後の更新だゾ！！それでは、始まるゾ！！

ドラミちゃんの家に行くソ

「到着だぜ。」

キッドはそう言つと、時空間から抜け出し、地に着いてタイムマシンから降りた。

「お前たちも降りろ。」

「う、うん……。」

キッドに促されるがままに、5人はタイムマシンから降りた。

「一体ここはどこなんですか？」

洋介が尋ねた。

「ここはね、22世紀の東京よ。そうね、あなたたちが住んでる時代の約100年後つて言つた方が分かりやすいかしら。」

「100年後の東京……。」

ドラミの返答に、洋介は言葉が詰まってしまった。そして、他の4人と共に辺りを見渡す。空中を普通に車のようなものが走り、空中で遊んでいる子供たちがいる。

「これが、よくお兄ちゃんが私に話していた未来の世界なんだ……。」

ひまわりは、物心のついた時から、兄のしんのすけにそういう話を聞いていた。

「どうだ、驚いたか？まあ、無理もねえか。じゃあ早速行くぜ。」

「どこによ？」

ひまわりは尋ねた。

「ドラミの実家だよ。」

キッドはそう言うと、四次元ハットから人数分のタケコプターを出し、ひまわりたちに手渡した。

「何だこれ？プロペラみたいだけど。」

大成が不思議そうにタケコプターを見つめた。もちろん、他の4人もそうだったのだが……。

「ああ！！思い出した！！これお兄ちゃんがよく言ってたタケコプターよ！！」

突然ひまわりが叫んだ。

「タケコプター？」

晶子とひとしが同時に言った。すると、ひまわりはタケコプターを頭につけた。

「確かね、こうやって頭につけて、スイッチを押すと……………」

あゝ飛んだー！ー！！」

ひまわりは宙に浮いた。

「ウワー！！スゲー！！マジで飛んでるぜ。」

大成はそう叫んだ。

「その通りよ、さあ、みんなもタケコプターを使って。」

ドラミがそう言うと、4人はタケコプターを頭につけ、スイッチを押した。

「すごいわー」

「うわあ、何か夢みたいだ……。」

晶子と洋介が感想を述べているその先で、

「よし！！ひとし、競争だ！！」

「負けないよ!!」

ひとしと大成は勝手に競争を始めてしまった。それを呆れたという表情でひまわりは見ていた。

「あの馬鹿2人……………」

「お前もあの馬鹿の仲間だろ？」

キッドがいつの間にか隣にいた。

「うるさいわね!!余計なお世話だつつつの!!それより、急がないといけないんじゃないの？」

ひまわりはキッドに言った。

「おっと、そうだった。おいお前たち!!競争してないでとっと行くぞ!!」

「ちえっ、面白いところだったのに。」

そう文句を言う大成を筆頭に、4人はキッドのところに集まった。

「よし、じゃあドラミ、出発するか？」

「ええ!!じゃあ私の家に出発!!」

「なすのおしんこ!!」

「出た!!ひまわりの迷言。いい加減にそついうの止めるよな。」

大成が言った。

「ふん！！文句を言うなら、お兄ちゃんに言ってよね」

そんな話をしながら、一同はドラミの家に向かった。

「お兄ちゃん、セワシさん♪帰って来たわよ。」

ドラミは家の扉の前に着くと、インターホンにそう言った。しばらくすると、扉が勝手に開いた。

「すごい、自動ドアだ。」

ひとしが言った。

「お前たち、そんなことでいちいち驚いてちゃ、身がもたねえぜ。」

キッドが苦笑いをしながら言った。一同は家の中に入り、リビングルームらしきところに入った。すると……、

「ドラミちゃん、久し振りだね♪」

「ドラミ、お帰り♪」

セワシとドラえもんが一同を迎えた。

「ようドラえもん！！本当に久し振りだな。元気だったか？」

キッドは尋ねた。

「まあね、未だに後遺症は残ってるけど、それ以外は問題ないよ。」

ドラえもんはそう答えた。すると、キッドは少しだけ表情を曇らせ

て、

「そうか……………、やっぱり残っちゃったか……………。コントロールチップの後遺症が……………」

「うん……………」

ドラえもんはうなずいた。

4年前に出来杉博士に変装したDrアチモフによって、コントロールを埋め込まれてしまい、時空と世界の征服活動に荷担してしまったドラえもん。

親友テレカの力によって、体内のコントロールチップは取り除くことが出来たのだが、時々、体が自分の思ったこととは、全く違うことをしてしまうという後遺症が残ってしまった。今は週に1回ロボット病院に行って、治療をしてもらっているという状況だ。しかし性能は、ネコ型ロボットの中では、ダントツで良くなった。2人が話しているのを、ひまわりたちは怪訝そうに見ていた。

「ドラミちゃん、2人は何を話しているの？」

ひまわりが尋ねた。あの事件に關してだけは、しんのすけから一言も聞かされていなかった。

「まあ……………、久し振りに会ったから色々話したいことがあるんだと思うわ。」

ドラミはそう答えた。

「ふん……………」

ひまわりはそう言った。

（よかった……。しんちゃんはあることだけは、ひまわりちゃんに話さなかったみたいね……。）

ドラミはそう思うと同時に、胸をなで下ろした。いくら操られていたとはいえ、自分の兄がかつてやったことを、ひまわりたちが知ったら……。そう考えるだけで恐かった。

「まあ、俺には、頑張れとしか言えないな……。のび太のやつ、野球頑張ってるぜ。ジャイアンとスネ夫と一緒にな。」

キッドはドラえもんに言った。

「そうなんだ。何かセワシくんが野球上手くなったと思ったら、そういうことだったんだ。」

ドラえもんはそう言った。のび太たちの小学校の卒業式の日以来、ドラえもんはのび太たちに会っていなかった。タイムテレビで様子を見ることさえもなかったのだ。

「甲子園目指すって言ってたっけかな。」

キッドはそう付け足した。すると、

「ああ！！そう言えば、最近おじいちゃんの高校時代の古い写真を見つけたんだ！！ちよつと取ってくるよ。」

セワシはそう言うと、リビングから出て行った。

「ところでキッド、ドラミも一緒に来ているということは、仲直りしたということでもいいのかな？」

突然ドラえもんが尋ねた。

「あ、ああ……、もちろんだぜ。なあドラミ？」

「ええ、しんちゃんのおかげで仲直り出来たのよ。」

ドラミはそう答えた。

「しんちゃん？ああ、あの時のジャガイモみたいな頭をした幼稚園児ね。」

ドラえもんはそう言った。

「その幼稚園児はもう小学校4年生よ。この子はある時のしんちゃ

んの妹で、今は5歳よ。」

ドラミはひまわりの頭に手を置きながら言った。

「お兄ちゃんがジャガイモ頭ねえ……………」

ひまわりは、ドラえもんのその言葉に不快感を覚えた。

「い、いやゴメンゴメン、それしか特徴思い出せなくてさ……………」

ドラえもんはひまわりに謝罪した。

「別にいいわよ……………」

ひまわりはそう言った。

「ふう…………、よかったよかった…………。ああそうだ!!」

ドラえもんが突然何かを思い出したように叫んだ。

「何だよ？」

キッドは尋ねた。すると、ドラえもんはニヤリとしながらキッドの顔を見つめた。

「な、何だよそんな顔して。気持ち悪いぞ。」

キッドはそう言った。

「キッド、よかったね♪高い所に宙吊りの刑にならなくて♪」

ドラえもんは満面に笑みでそう言った。すると、

「あ、ああ……………」

キッドは笑顔を引きつらせながらそう言った。

「お兄ちゃん、せっかくだからさ、キッドのためにも、それやった方がいいと思うのよ。」

突然ドラミはそう言った。するとキッドは、

「お、おい!!お前突然何を言うんだよ!?!」

かなり焦ってる。

「さすがは僕の妹♪ちゃんと僕の考えが分かってるんだね♪」

ドラえもんは嬉しそうに言った。

「ドラえもんまで何言ってたんだよ!？」

キッドは涙目になりながらドラえもんを体をゆさぶった。

「キッド、君も嫌でしょ?このまま高所恐怖症のままだと。君も男なら、ドラミの前で男を示せ。」

ドラえもんはそう言った。

(何言ってやがんだよ。)

キッドは心の中でそう思った。

「つつか、何あの3人で盛り上がってたんだよ。客は俺たちになのに……………」

その様子を見ていた5人のうち、大成がそう呟いた。

「キッドさんって、高所恐怖症だったんだ……………」

晶子がそう言った。

「な〜んだ。私、キッドに失望した。」

ひまわりがそう言う。

「どうでもいいから、早く旅行に行きたい……………」

そう言うのはひとし。

「水金地火木土天海。となりのきやくはよくきやくききゆうきやくだ。」

「洋介くん、言えてないから……………」。

「それを言わないでよ、退屈しのぎにやってるんだからさー!」

晶子のツッコミにムキになる洋介。5人はドラえもんたちのくだらない話のせいで、その場に放置されてしまった。

「キッド、高い所で宙吊りに……………」。

「ドラえもん!ふざけんなー!」

「キッド、私のためにも……………、お願い。」

「お前のためにの意味が分からねえつつつの!」

「もういい加減にしろーーーーー!!」

ひまわりは、思わずそう叫んでしまった。それにより、何とかその場は収まった。

「はあ……………、勘弁してくれよ……………」

涙目でそう言うキッドの声が、むなしくリビングに響いた。

ドラミちゃんの家に行くゾ（後書き）

どうも、桜田ネネです。私も10歳になって、だいぶ大人っぽくなったのよ。今はマサオくんとラブラブ、何歳になったら結婚しようかしら。ふふふふ……。

って違う違う！！今日はそんなノロケ話聞かせるためにこの場に出たんじゃないのよ。ええと、次回の『ひまわりの未来冒険記』は、セウシさんがのび太さんの高校時代の写真をみんなに見せるみたいなの。のび太さん、スネ夫さんや武さんと野球やってるらしいけど。その写真でこの先どうなるのが分かってしまうのね。気になる気になる。分かっているのはこれくらいかしらね。一体いつになったら旅行が始まるのかしら。次回こそ旅行が始まることを期待しつつ、この辺でお開きということで。以上、桜田ネネでした。次回もお楽しみに。

アルバムを見るゾ（前書き）

私大の入試が終わったから連載再開だゾ！！

アルバムを見るゾ

「みんな〜！！おじいちゃんの写真あったよ！！」

奥の部屋からセワシが戻って来た。

「本当に？早速見せて見せて〜。」

ドラえもんがセワシのもとに駆け寄りながら言った。

「まあまあ、そんなに慌てないで。他にも色々な写真があったから、持って来たんだよ。」

セワシはそう言うと、3冊の古いアルバムをテーブルの上に置いた。

「へえ〜、相当古いぜこれ。」

キッドがアルバムの一つに触りながら言った。

「まあ、当然だよ。僕のおじいちゃんのおじいちゃんが生きてた頃の写真だからね。」

セワシはそう言うと、1冊のアルバムを開いた。その一番最初の写真は、のび太としずかの結婚式の写真だった。

「きれいな花嫁ね〜。」

晶子は写真の中のしずかを見ながら言った。

「あなたが住んでる時代では、2人ともまだ高校1年生よ。お兄ちゃんね、のび太さんが小学校5年生の時に、タイムマシンでのび太さんのところに行って、共同生活してたのよ。」

ドラミはそう言った。

「それはまたどうしてですか？」

洋介が尋ねた。

「それはね、おじいちゃんの未来を変えて、僕たち子孫の暮らしをよくするためだったんだよ。」

セワシが答えた。

「んで、そののび太っていう人は結局どうなったんだ？」

大成がドラえもんに尋ねた。するとドラえもんは、ニコリと笑い、

「見ての通り、立派な大人になったよ。まあ、結局僕の力なんかいらなかったみたいだけどね。」

ドラえもんはそう言うと、表情を曇らせた。その様子をキッド、ドラミ、セワシは黙って見つめていた。

（ドラえもん、過去の記憶と戦っているんだな……………）。

2007年に起きたあの事件以来、ドラえもんは22世紀に戻って来たら、周囲のヤツラに色眼鏡で見られるようになってしまったからな……………。

俺たちドラえもんズ、ドラミ、パワえもんはドラえもんを常を守っ

ているわけにはいかなかった。

街に出れば、色眼鏡で見られ続け、その上コントロールチップの後遺症が残った。これではドラえもんの心に深い傷が出来るのは当然だ。現に出来てしまった。時々見せる暗い表情が、何よりもそれを物語っているぜ。だが、ドラえもんは頑張ってそれと向き合っている。俺たちも色々サポートしてやらねえとな……………。）

キッドはそう思った。

「よし！！じゅあ次のアルバムを見てみよう！！」

セワシが上手く話をそらすために、別のアルバムを開いた。

「あっ！！」

ひまわりがその写真を見て、思わず声をあげた。

「ひまわりちゃんどうしたの？」

ひとしはそう言いながらその写真を見た。

「ひまわりちゃんのお兄ちゃんが写ってる。後、キッドさんとドラミさん、それからドラえもんさんも。」

ひとしがそう言つと、

「この赤ちゃん、ひまわりじゃねえか？」

と、大成が口を挟んだ。

「本当だ。ひまわりちゃんよ。」

晶子が言った。

「これって何の写真なんですか？」

洋介がキッドに尋ねた。

「これ？これはな、しんのすけたちのふたば幼稚園卒園式と、のび太たちの小学校卒業式の後に、しんのすけの家でやったパーティーの写真だ。ほら、ここに2008年3月って記されてるだろ？」

キッドはそう言いながら写真の右下を指差した。そこには、確かに『2008・3』と記されている。

「確かなのび太さんって、この時はまだ東京に住んでたのよね？どうしてお兄ちゃんと出会ったのよ？」

ひまわりはキッドに疑問をぶつけた。しんのすけからの話の中で生まれた疑問だった。キッドはその質問に言葉を詰まらせた。そして、チラリとドラミの方を見た。ドラミはキッドに対して、首を横に振ってみせた。キッドはそれに小さくうなずくと、

「たまたまのび太たちが春日部に訪れてな、道ばたで出会ったみたいなんだ。ほら、お前の兄ちゃんってよ、変な風に人に絡むの好きだったろ？それで仲良くなって、この写真というわけ。」

キッドは嘘をついた。ドラえもんを守るために。ドラえもんはそれを聞いて、ますます表情を曇らせてしまった。

「もうアルバムをいいぜ。ありがとな、セワシ。」

キッドはそう言うと、アルバムをセワシに渡した。

「う、うん……。」

セワシはうなずくと、アルバムを戻しに奥の部屋に行った。

「ところで、どうしてその子たちを連れて来たの？」

突然ドラえもんが話題を変えた。

「ああこいつらか？実はな、しんのすけが俺たち2人を仲直りさせてくれたお礼に、こいつらを未来旅行に連れて行くんだ。」

キッドは得意そうに言った。

「未来旅行？」

ドラえもんは首をかしげた。

「ええそうよ。今日は、私たちが仲直りをしたという報告を兼ねて、協力を頼みに来たのよ。」

ドラミがキッドに続けて言った。

「なあドラえもん、俺たちをサポートしてくんねえか？タイムテレビでこいつらを見守ってほしいんだ。」

キッドはドラえもんに頼んだ。

「うん、分かったよ。ちゃんと見守ってるから。他のドラえもんズの仲間にも伝えておくよ。」

ドラえもんは快諾した。

「ありがとうよ！！さすが俺の親友だ！！」

キッドはそう言つと、ドラえもんを抱き付いた。

「キッド、苦しいよ。離れて。」

「ああ悪い悪い。」

キッドはそう言つと、ドラえもんから離れた。

「でもキッド、君たちに何かあった時、僕たちはすぐには助けに行

けない。だから、僕たちが到着するまで、君とドラミで頑張っ
てね。未来の世界には、凶悪犯罪者が多いから……………」

ドラえもんは真顔でキッドに言った。

「分かってるぜそんなこと。大丈夫だ。こいつらとドラミは、命を
かけて守るから。」

キッドはドラミやひまわりたちを見て言った。

「キッド……………」

ドラミはその言葉に感激したらしく、キッドを見つめていた。

「けっ……………、暑苦しいお言葉。」

その後ろでひまわりがそう毒づいていたことは、誰も知らない。

「じゃあなドラえもん、何かあった時はよろしく頼むぜ。」

キッドはドラえもんに言った。

「分かってるよ。気をつけるんだよ。」

ドラえもんはそう言った。

「じゃあね、お兄ちゃん、行くわよみんな。」

「はい!!」

ドラミの言葉で、ひまわりたちはタケコプターでタイムホールのある場所へ出発した。それをドラえмонとセワシは、黙って見つめていた。

「ドラえもん、本当に大丈夫かな? 嫌な予感がするんだけど……」

セワシが言った。

「きっと大丈夫さ! キッドならきっとドラミたちを守ってくれるさ。もちろん、僕たちも協力を惜しまないよ!」

ドラえもんが笑顔でそう言うと、セワシの表情も自然と緩んだ。そしてしばらくして、2人は家の中に入って行った。

「よし！！早速出発するぞ！！」

タイムホールがある場所に一同は戻って来た。キッドがやけに高いテンションで言った。

「つつかキッドさ、これからどの時代に行くの？」

ひまわりが尋ねた。

「基本的にお前らの希望で旅行は進めて行くぜ。どの時代に行ってみたいんだ？」

キッドはひまわりたちに尋ねた。

「そんなこと急に聞かれてもな……………」

大成が困ったような表情をした。

「未来なんて分からないし……………」

晶子がもつともらしい意見を言った。

「そうか……、そりゃそうだよな、未来なんてデカ過ぎて分からないよな……。」

キッドはそう言つと、手を頭に当てて考え始めた。そしてしばらくして……。

「そうだ！！未来の春日部を見に行こうぜ！！」

キッドが思いついたことを言った。

「春日部はいいけど、一体どの年代にですか？」

ひとしが尋ねた。するとキッドは、ニヤリとして、

「お前たちが中学生になつてゐる時代、西暦2020年だ。確かしんのすけが19歳になつてゐるはずなんだが……。どうだ？」

キッドは5人に尋ねた。

「面白そうじゃない！！行こう行こう！！」

ひまわりは真つ先に賛成の様子。

「俺たちの中学生時代か……。どんな風になつてゐるんだろうな。」

「

大成はまんざらでもなさそうだった。

「まあ、最初は近いところからが一番いいのかも……。うん、僕も賛成。」

「私も賛成！！」

ひとしと晶子が言った。

「みんながそう言うなら……。僕も……。」

洋介も賛成のようだ。

「それで決まりね♪じゃあ、早速出発しましょう！！」

「オーーーーー！！」

ひまわりたちのテンションは最高潮になっていた。勢いよくタイム

マシンに乗ると、タイムマシンは西暦2020年の春日部に向かって行った。

「なあしんのすけ。」

「何？風間くん。」

一方、こちらは西暦2011年のしんのすけの家。

「ひまわりちゃんたちを送りだして、もう1時間過ぎたよ。」

風間はしんのすけにそう言った。

「あつ、そう言えばそうだよ。確かキッド、1時間後に戻って来て言っただのに……。」

しんのすけに、不安がよぎった。

「何があつたのかもしれないな……………」

風間がしんのすけの考えていたことを代弁した。

「オラもそう思つてたところだゾ。」

しんのすけはそう言うと、ウィニングイレブンを楽しんでいる。防衛隊のメンバーを見た。今は、しんのすけと風間の番ではなかったため、コタツで会話しているところだったのだ。

「しんちゃん、考え過ぎよ。」

突然みさえが話に割って入って来た。

「か、母ちゃん……………」

「少なくとも、夕ご飯までに帰って来れば問題ないし、あんまり心配しなくても大丈夫じゃないかしら？あの事件でタイムパトロールがより強化されて、犯罪が激減したって、あなたたちが幼稚園と小学校に行つてる間にドラミちゃんから聞いたから。」

みさえはそう言うと、席を立ち、再び台所に向かつて行つた。

「だとさしんのすけ。お前はどつ思つ？」

風間はしんのすけに尋ねた。

「母ちゃんの言う通りかも……………」

しんのすけはそう言うと、再びゲームを楽しんでいる防衛隊を見た。

「まあしんのすけ、今日は久々にみんなそろったことなんだし、楽しもう。」

風間は言った。

「そだね。」

2人はゲームを楽しんでいる防衛隊の輪に入って行った。少しばかりの不安を抱えながら………………。。

アルバムを見るゾ（後書き）

僕、佐藤マサオ10歳。今、ネネちゃんと付き合ってるんだ。あの事件以来、ほとんど泣かなくなっただし、勇気も持てるようになった。今回はそんな僕が次回の予告をするよ。

次回はいいよ、西暦2020年をひまわりちゃんたちが旅するんだ。僕たちは19歳で高校を卒業してる。僕たちがどんな生活を送っているのかが分かるかも。そんな中、しんちゃんと風間くんの不安は募るばかり。僕を含めた他の防衛隊のメンバーは、ゲームに夢中になって全く不安なんて感じてない。でも、変だよ？1時間後に帰って来るはずなのに、帰って来なかったんだから。まあ、次回を見ればそれも分かるかも！！じゃ、次回もお楽しみに！！感想と評価待ってまゝす！！

オラの未来を見るゾ（前書き）

最初に向かったのはひまわりたちが14歳の時代だった。果たして何が起こるやら……。

オラの未来を見るゾ

「よし、着いたぜ!!」

キッドのその言葉で、一同は地に降り立った。

「なんか、あまり今と変わってないぜ。」

大成が率直に言った。

「まあまあ、たった10年やそこらで、そんなに変わらねえって。よし、まずはしんのすけの家にも行ってみるか?」

キッドは5人に提案した。

「私の家に!?!」

ひまわりが思わず叫んだ。

「何だよ、嫌なのか?」

「いや、別にそう言うわけじゃ……………」

「じゃあ決定だぜ!!」

「ちょっ……………、大成!!」

ひまわりが乗り気でなかったのは、それなりに理由があった。未来の自分たち家族を見るのに、何となく恐怖感を覚えていたのだ。し

かし、そんなひまわりとは対照的に、他の4人は期待で胸を膨らませていた。

「分かったわよ……………」

こうして一同は未来の野原家に向けて出発した。

「誰もいないみたいね。」

ドラミの言う通り、野原家には誰もいなかった。

「ふう……………」

ひまわりは思わずホッとした。

「何だ、つまんねえの。」

大成は機嫌を損ねた。

「どこかに出かけたみたいね。」

晶子が車にないことに気付いて言った。

「どうやらそうらしいね。」

ひとしも納得した。

「キッドさん、ひまわりちゃんたちがどこに行ったか調べられませんか？」

洋介が尋ねた。

「ああ、それなら可能だぜ。」

キッドはそう言うと、四次元ハットから何かを取り出した。

「何それ？」

大成が尋ねた。すると、

「ああ！！これってタイムテレビじゃない！？」

ひまわりが割って入った。

「ああそうだ。お前の言う通り、これはタイムテレビだ。これを使って未来のお前たちの様子を見るぜ。」

キッドはそう言うと、タイムテレビのスイッチを入れ、ダイヤルを合わせた。すると、

「あつ！！映った！！」

晶子が叫んだ。

「ここはどこだ？何か周りに人がいっぱいいるみたいだけど。」

ひとしが首をかしげながら言った。

「これって、競技場じゃないか？」

大成が言った。

「そう言われてみるとそうかも……。キッドさん、建物全体を映せませんか？」

洋介が尋ねた。

「ああ、もちろん出来るぜ。」

キッドはそう言うと、再びタイムテレビを操作した。すると、建物全体が映し出された。

「あつ、これって……」。

埼玉スタジアムじゃない!!」

ひまわりが叫んだ。

「そうだよ、埼玉スタジアムだよ!! てことは、ひまわりたちはサッカーを見に行ったんだ。」

大成が言った。

「でも、さっき、しんのすけくんは映ってなかったよ。」

ひとしが言った。

「あつ、そう言えば……………」

晶子と洋介が口をそろえて言った。

「もしかして……………。キッド、サッカー選手を1人1人映して!!」
ドラミが言った。

「わ、わかった……………」

キッドはそう言うと、サッカー選手を1人1人映して行った。青いユニホームのチームには、目に留るような人物はいなかった。しか

し、赤いユニホームの選手たちをしばらく映していると……………。

「あつ！！この人河村くんだ！！」

突然ひまわりが背番号10をつけた選手を見て言った。たった今、背番号11の選手のゴールをアシストしたところだ。そして、その11番の選手が河村に駆け寄って来た。その選手を見て、ひまわりは絶句した。

「これ……………、お兄ちゃんだ……………」

そう、ひまわりの目に映ったのは、紛れもなく19歳になった兄の姿だった。そう、河村としんのすけは、高校卒業後に、Jリーグーになっていたのである。

「スゲー……………、お前の兄ちゃんがプロのサッカー選手になってる……………」

大成は驚きを隠せなかった。

「しかも、地元の浦和レッズに入団するなんて……………」

ひとしが続けて言った。

「どうやら、これがしんちゃんと河村くんの未来の姿みたいね。」

ドラミがニコリとしながら言った。

「どうやら、みさえさんたちは、息子の試合を観戦に来たみたいだな。」

キッドが続けて言った。

「これがお兄ちゃんの未来なんだ……………。カッコいい!!」

ひまわりは嬉しそうに言った。

「どうだひまわり、満足したか？」

キッドはひまわりに尋ねた。

「うん、もちろん!!」

ひまわりはそう答えた。

「よし、じゃあ次はどこに行く？」

大成がみんなに尋ねた。

「何でお前が仕切つてんだよ……。まあいいか。お前たち次はどこに行きたいんだ？」

キッドは尋ねた。

「そうね……。あっそうだ!!」

突然晶子が何かをひらめいた。

「どうしたんだよ？」

大成が尋ねた。

「もっと遠くの未来に行きましょうよ！！例えば、私たちが20歳になった時とか」

晶子はそう言った。すると、

「おお！！それいいじゃねえか！！」

「うん！！賛成するよ。」

大成と洋介がそれぞれそう言えば、

「私イケメンと付き合っているかも」へへへへへへへへ。

「気持ち悪つ……。でも、その意見には賛成だよ。」

ひまわりとひとしがそう言うなど、結局全員が賛成した。

「よし！！タイムマシンに戻って、西暦2026年に行くぞ！！」

「オーー！！」

キッドの掛け声に、5人全員が雄叫びをあげた。しかしそんな中、約1名が乗り気でなかった。

「うーん……………」

「おい、ドラミどうした？そんな気難しそうな顔した。」

キッドはドラミに尋ねた。

「ねえキッド、私たち、ひょっとしたら誰かに見られてるかも……………」

「誰かに見られてる？一体誰にだよ？」

「それが分からないから恐いんじゃない……………」

ドラミはキッドやひまわりたちが会話してる間、ずっと何者かの視線を感じてビクビクしていた。しかし、実際に視線を送っている者は全く見えず、それがさらにドラミの恐怖心を駆り立てていた。

「そんなこと言われてもなあ……………。この周り、誰もいないぞ。」

キッドはドラミの意見を否定した。

「だったらいいんだけど……………」

ドラミはそう言ったものの、未だに強い不安を感じていた。

「さっさと出発するぜ。3泊4日の予定しかねえんだから、時間ももったいないぜ。」

キッドはそう言うと、先にタイムホールに向かっていたひまわりたちの後を急いで追った。ドラミはそんなキッドを黙って見つめていた。

(キッド……………。私恐い……………)

ドラミはそう思いながら、キッドたちの後を追いつづけた。しかし、

突然、目の前にドラミの行方を阻む者が現われた。その者は、全身黒の服装の人間だった。

「な……………何よ？」

ドラミは恐怖のあまり、後退りした。

「ネコ型ロボットのドラミ、貴様にはっ少しだけ協力してもらっう。」

その者はそう言っつと、突然ドラミの体に手を伸ばして来た。

「キャッ！」

ドラミはあっという間に捕まっつてしまっつた。そして、叫び声をあげる前に、意識が遠のいてしまっつた。すると、ドラミを捕まえた者は、携帯電話でどこかに連絡した。

「ネコ型ロボットのドラミを捕まえました。もちろん、ちゃんとあれは用意しますから。じゃあ、今からドラミを連れて本部に戻ります。」

その者はそう言っつと、電話を切り、携帯をポケットにしまっつた。そしてニヤリとして、

「英雄さんたちもこれで終わりだな……。へへへへへ。」

と言った。そして、ある一枚の写真をポケットから取り出して見た。

「こいつらを抹殺してしまえば、全てが俺たちの思い通りだ。特にこの2人はどうしても殺っておきたい。」

その男はそう言うつと、ドラミを抱え、自分の車に向かって歩き始めた。

「おかしいゾ……………」

しんのすけはそう言った。

「しん様、どうかなさいました？」

「そうよ、さっきから全然楽しそうじゃなかったし。」

あいとネネは、しんのすけに声をかけた。

「もう2時間も経つのに、ひまたちがちつとも帰って来ないんだゾ。」

しんのすけは2人に言った。すると、その場にいる防衛隊全員に聞こえたのか、防衛隊がゲームを止めてしんのすけの周りに集まった。

「確かにおかしいよ。キッドとドラミちゃんが約束を破るわけないし……。」

マサオが言った。

「そうだな、何か悪い事が起きてなければいいんだが……。」

河村が言った。

「ひまわりちゃんたちが心配だ……。」

ボーちゃんが言った。

「しんのすけと僕が不安に思っていたことは、どうやらただの思い込みではなかったみたいだね……。」

風間はそう言うと、しんのすけを見て、

「しんのすけ、何とかしてひまわりちゃんたちの所に行けないのかよ?。」

と尋ねた。

「それが出来たら、オラだってこんな所で黙っていないゾ！タイムマシンがなければ、ひまわりたちのところには行けない……………」。

しんのすけはそう言いつと、下を向いてしまった。

「しん様、のび太さんのタイムマシンで行ってみましようよ！」

あいはそう言つた。しかし、しんのすけは下を向いたまま首を横に振り、

「それは無理だゾ…………」。のび太くんは今タイムマシンを持ってないし、スเปアポケットもドラえもんに戻したみたいだし…………」。

しんのすけはそう言つと、首を上げ、

「今オラたちに出来ることは、ここで黙って待つことぐらいだゾ…………」。

「そ、そんな…………」。

マサオは思わずそう言ってしまった。今回ばかりは、さすがの防衛隊も、手も足も出せなかった。

「キッド、待ってよ!!」

「遅いぞドラミ!! たく本当にトロいんだから!!」

「余計なお世話よ。」

ドラミはだいぶ遅れてキッドたちのもとに着いた。ひまわりたちは既にタイムマシンに乗っている。

「急ぐぜ!! 旅行はまだまだこれからなんだから。早く乗れ!!」

「う、うん。」

ドラミはキッドに促されるがままにタイムマシンに乗った。キッドもその後が続いて乗った。

「全員乗ったな? よし!! じゃあ西暦2026年の春日部に出発だ!!」

「オーーーー!!!!」

キッドの掛け声と共に、タイムマシンは次なる時代に向かって行っ

た。

しっかりとドラマを連ねて……………。

オラの未来を見るゾ（後書き）

僕、ボーちゃん10歳……。あまり、話すの得意じゃないから……、予告は手短かにします……。

さて今回は、時間通りに帰って来なかったひまわりちゃんたちのもとに……。僕たち春日部防衛隊が向かおうとするんだけど……。後、いよいよドラえもんズのメンバーが全員登場するんだよ。これは本当の話だよ。嘘だったらゴメンね。じゃあ、次回もお楽しみに♪

感想と評価、ドシドシ寄せてね♪

何かが、変だゾ（前書き）

ひまわりが帰って来ないために、しんのすけたちの不安は増すばかり。

何かが、変だソ

「ここが西暦2026年か。何か今とそんなに変わってないな。」

洋介が発した言葉だ。彼の言う通り、春日部はほとんど変わっていなかった。

「お前たちが春日部にいるかどうかは分かんねえけど、みさえさんたちは間違なくいるだろうな。」

キッドが言った。

「私、早速行きたいところがあるの。」

ひまわりが言った。

「どこだよ?」

大成が尋ねた。

「ん、直接私たちには関係ないんだけど……」。

ひまわりはそう言うと、言葉を詰まらせた。

「だからどこだって!？」

もったいぶるひまわりに対して、大成は語気を強めた。

「マサオくとネネちゃんのところに行ってみたいな〜って。」

ようやくひまわりは答えた。

「えっ！？何で？」

ひとしが尋ねた。

「やっぱり、お兄ちゃんの親友だし、今結構ラブラブみたいなことをお兄ちゃんが言ってたんだ〜。それがこの時代でも続いているのかな〜って〜」

ひまわりはそう答えた。

「なるほどね〜、つまり2人が将来結婚するかどうかを確認したいわけね？」

晶子がひまわりに尋ねた。

「うん！！それをお兄ちゃんに報告するんだ〜」

ひまわりが嬉しそうに答えた。

「そうか。でもひまわり、くれぐれもマサオとネネには言つなよ。」

ここでキッドがひまわりに忠告した。

「分かつてるって!!」

ひまわりがキッドをバシバシと叩きながら言った。

「よし!!じゃあ早速出発す……………」。

「キッド。」

キッドが言いかけたところで、突然ドラミがキッドに声をかけた。

「何だよ?せつかくテンション上げようと思ってたのに。お前な、そう言うのをKYって言うんだぜ。」

キッドはそう言った。

「ねえねえ、大成くん。KYって何?」

洋介が大成にこっそりと尋ねた。

「お前知らねえの?『空気読めない』でKYだ。」

「あつ、なるほどなるほど。」

洋介の疑問が解決された。

「つつかキッド、今時そんな言葉使つなんて……………、お兄ちゃん

が幼稚園の時の言葉よ。」

ひまわりがため息をつきながら言った。

「それだけ流行りに鈍感なのよ……………」。

晶子が続けて言った。

「ちょっと話があるの。あっちでいい？」

ドラミはキッドに尋ねた。

「あいつらに聞かれたくないつつうんならいいぜ。」

キッドはそう言つと、

「ちょっとドラミと大事な話があるから、ここで待っててくれ。」

とひまわりたちに言い残し、ドラミと共にひまわりたちから離れて行った。

「何なんだ？」

ひとしが首をかしげながら言った。

「さあ、やっぱり2人イチャイチャしたい時もあるんじゃないの？
ウヒヒヒ。」

大成が嫌らしい顔をしながら言った。

「変態……………」。

ひまわりはその一言で片付けた。

「何かドラミちゃん、向こうに行く時、何かニヤリとしてたような気がするんだけど……………」。

洋介が言った。

「だからそれは、『これですばらく2人きりになれるわ』って考えたからニヤけたんだって!!」

大成が自分なりの解釈を言った。

「んなわけないでしょう……………。考え方が根本的に間違ってるわよ……………」。

晶子が呆れながら大成にツツコミを入れた。

「そ、そうか?」

大成は頭をかきながら言った。

「あの2人が戻って来るまで、何か暇つぶししようよ。」

ひとしが提案した。

「そうね、じゃあね……………」。

ひまわりはそう言つと、考えを巡らせた。

「しんのすけ、本当にただ待つだけでいいのかよ？」

風間はしんのすけに尋ねた。

「そんなこと言われたって、それしか出来ないんだゾ。未来に行く方法なんて、タイムマシン以外分からないし、それがのび太くんのところがない以上、方法なんて見つかるわけないゾ。」

しんのすけはそう答えた。

「もう、ひまわりちゃんが帰って来る予定の時間から、3時間が過ぎましたわ。」

あいの言う通り、外はすっかり暗くなっていた。本来ならば、風間たちは家に帰らなければならぬ時間だ。しかし、それぞれが親に理由を連絡したため、ここにすることが出来た。

「あなたたち、本当に家に帰らなくていいの？」

みさえは風間たちに尋ねた。

「大丈夫です。」

風間たちは口をそろって言った。

「そう……………」

みさえはそう言うと、時計を見た。そろそろひろしが帰って来る時間だった。

「ひまわりが帰ってないって本当なのか!？」

ひろしは家に帰って来るなり、みさえに尋ねた。1時間前にみさえ

が連絡しておいたのだった。

「ええ、風間くんたちもまだいるわ。」

みさえはそう言った。

「そうか……。最悪の事態が起こっちゃったってわけか……。」

ひろしは表情を曇らせながら言った。

「とりあえず、家の中に……。」

「お前は誰だ!?!」

「!?!」

突然、家の中かしんのすけの怒鳴り声が聞こえた。

「何？今の！」

「みさえ、行くぞー！」

ひろしはそう言うと、みさえと共に家の中に入って行った。するとそこには……………。

「遅い！！！！！」

大成は怒鳴り声をあげた。あれから随分と時間が経つのに、キッドとドラミが一向に戻って来ないからだ。

「クソ、イチャイチャすんの長過ぎだー！」

大成はそう叫ぶと、地面に落ちている石を思いっきり踏んだ。

「だから違うって……………」

晶子がやんわりと大成の見解を否定した。

「ねえ、2人が行った方向に行ってみない？」

ひまわりがみんなに提案した。

「ええ？僕恐いよ……………」

洋介が言った。

「洋介くん大丈夫だって、みんながついてるんだから。」

ひとしが言った。

「仕方ねえな……………。じゃあ2人の現場でも抑えるか！！」

大成が言った。

「そうね、ここで待ってるよりは、いいかもね。」

晶子も賛成のようだ。

「よし、じゃあ行こうー！！」

ひまわりはみんなにそう呼び掛けた。

「その必要はないぜ。」

突然5人の後方から声がした。5人は声のする方を向いた。そこには、

「キッド、ドラミちゃん!! やつと戻って来た!!」

ひまわりの言う通り、キッドとドラミがいた。5人は一斉に2人のもとに駆け寄った。

「何やってたんだ2人で? まさかイチャイチャしてたとか?」

大成が2人に尋ねた。

「だから違っつて!!」

今度は4人で大成にツツコミを入れた。

「そうか？本当に何やってたんだよ？」

大成は、今度は真面目に質問した。

「ちょっとね、オトナの話よ。」

ドラミはそれしか答えなかった。

「だからオトナの話って何！？俺たちを待たせたんだから、それくらい答えてくれよ！！」

大成は声を荒げて言った。するとキッドは、左腕を上げて、大成の方に向けた。

「！！！？？」

大成は言葉を失った。なぜなら、自分の方に向けられたキッドの左腕には、空気砲が装着されていたからだ。

「これ以上グダグダ言つと、頭吹っ飛ばすぜ。」

キッドはニヤリとしながら言つた。それを横で黙って見ているドラミもニヤリとしていた。ひまわりたち5人は、信じられない光景に、完全に言葉を失ってしまった。

「あなたは誰なのよ!？」

みさえは、しんのすけの目の前に立ちはだかっている男に尋ねた。服装は全身黒づくめだった。

「別にあんたら2人には用はないぜ。」

その男は、みさえとひろしの方を見て言つた。そして、再びしんの

すけたちの方を向くと、

「俺が用があるのは、コイツらガキどもだ。」

と、言った。

「オイ！！俺たちに何の用だよ！？」

「そうよ！！さつさと答えなさいよ！！！」

「警察呼びますわよ！！！」

河村、ネネ、あいが口々にそう言った。しかし男は全く微動だにしない。

「貴様らが何を言っても無駄だ。俺たちには、お前たちが邪魔なんだよ。」

男はそう言った。

「僕たちが邪魔！？それはどどういう意味だ！？」

風間が語気を強めて尋ねた。

「お前たちにはどうしても消えてもらわなくてはならないんだ。俺たちの活動に支障が出るからな。」

男はニヤリとしながら言った。

「言ってる意味が分からねえんだよ！！！」

河村はそう叫ぶと、コタツの上に置いてあつた空き缶をその男の顔面に投げ付けた。するとその瞬間、その男の手が河村に伸びた。そして気付いた時には、河村はその場に倒れ込んでしまった。

「河村くん!!」

マサオとボーちゃんが河村を抱き起こした。

「大丈夫だ……………」

河村は弱々しい声でそう言うと、男の方に視線を向けた。

「ここで全員消えてもらうのもいいが、もう少し楽しもうかな」

男はそう言うと、しんのすけの方を見た。しんのすけもその男をにらみ付けた。

「何のつもりだ!?!」

しんのすけは怒鳴った。すると男は、

「俺たちはただ、世界の英雄さんたちが邪魔なだけだ。特に2人には確実に消えてもらいたい。なあ？」

野原しんのすけくん？」

男はしんのすけの名を読んだ。

「ど、どうしてオラの名前を……………？」

しんのすけは尋ねた。

「お前たちは有名なんだぜ。俺たち闇の世界で生きる人間にはな。4年前にアチモフが起こしたネコ型ロボット暴走事件。お前たち覚えてるよな？」

男は尋ねた。

「……………忘れるわけがないゾ。」

しんのすけはそう答えた。

「お前たちがその事件の解決に荷担したつてのは有名だ。まあ、最終的にはドラえもんズの親友テレカの力でアチモフを倒したみたいだかな。それでもお前たちの勇氣ある行動なくしては、事件解決にはならなかったはずだ。だから俺たちは、そんなことにならないた

めにも、お前たちを先に消してしまおうと考えたのさ、ハハハハハハハハハハ！！」

男はそう言うと、大声を出して笑った。

「どうしてしんのすけなんだ！？」

ひろしが尋ねた。

「コイツが一番活躍したからだ。俺たちにとっては、コイツが一番危険人物。だから消えてもらう。野比のび太と一緒にには！！」

男はそう答えた。

「おっと、言い忘れてたが、そろそろお前の妹たちが捕まるころだな」

男はニヤリとしながら言った。

「！！！？？」

しんのすけはその言葉に愕然とした。自分が描いていた、最悪のシナリオ通りになってしまったのだから。

「どうなってんだよ、ひまわり!!」

「知らないわよ!!」

大成とひまわりがそう叫んだ。目の前には、自分たちに空気を砲を向けたキッドと、それをニヤリとしながら見てるドラミがいる。

「ひまわり、残念だったな。そろそろお前の兄ちゃんたちがくたばってるところだ。」

キッドはニヤリとしながら言った。

(……………。…どういうこと?)

ひまわりには、訳が分からなかった。4年前の事件を知らないひまわりには……………。

何かが、変だソ（後書き）

よお！！俺は河村やすおだ。チーターっと呼んでくれ！！いよいよ敵が現われたな。俺なんか一発やられたし。ひまわりたちも、なぜかキッドに空気砲を向けられてしまい、さっぱり意味が分からねえ！！そんなわけで、次回からはいよいよ事件の始まりだ。黒づくめの男の目的って一体何だ？俺たちはこのまま消されちまうのか？まあ次回を読めば分かるかもな。

以上チーターこと、河村やすおでした！！次回も絶対読めよ！！次の予告は酢乙女あいだからな！！

絶体絶命の、大ピンチだゾ（前書き）

しんのすけたちの目の前に現われた男の正体とは？そして、キッドとドラミはなぜひまわりたちを殺そうとするのか？読めば分かる！
？

絶体絶命の、大ピンチだゾ

(どういうこと……………?)

おそらくひまわりだけではなく、ひとし、大成、洋介、晶子もそう思っていたことだろう。

目の前で空気砲を自分たちに向けているロボットは、自分たちを未来旅行に招待してくれたドラ・ザ・キッド。そしてキッドの横で二やりとしているのは、そのキッドの彼女で、心優しいドラミだった。それは、何度目をこすって確認しても、変わらない事実だった。今に自分たちが殺されるという恐怖と、キッドとドラミに裏切られたという絶望感が、ひまわりたち五人を襲っていた。

「恐くなって怖じ気付いたか？」

キッドは今にも泣き出しそうな洋介に、空気砲を突き付けた。

「キッドさん、どういっつもりなんですか!？」

その様子を見ていた晶子が、キッドに尋ねた。

「別に何のつもりもねえぜ、これは命令なんだ。」

キッドはそう答えた。

「命令って……………。一体誰のよ!？」

ひまわりは怒鳴り声を上げながら尋ねた。

「あなたたちに知る必要はないわ」

ドラミはそれに答える。

「知る必要はないだ！？一体どういうことだよ！？」

大成がキッドに飛び掛かりながら言った。そしてキッドの左腕を掴み、空気砲を奪おうとした。しかし、右腕のパンチを頬に食らってしまい、その場にうずくまってしまった。

「大成くん！！」

ひとしが大成を抱き起こした。大成は、頬からほんのわずかだけの血が流れているだけで、意識ははっきりとしていた。

「大丈夫だ……………」

大成はそれだけ言うと、ひとしから離れた。

「ドラミ、もうそろそろ殺ってもいいか？」

キッドはドラミに尋ねた。

「いいわよ」

ドラミはそう言うと、ポケットから空気砲を取り出した。

（私たち…………、死んじゃうの？）

ひまわりはそう思いながら目をつむった。ひまわりたちにあるのは、

もはや絶望感だけだった。

「残念だったな、しんのすけくん」

しんのすけは、黒ずくめの男の目の前で力なくうずくまっていた。
ひまわりの死を覚悟したからだ。

「そんな……、キッドくんやドラミちゃんがついていたじゃないか！！」

ひろしが男に向かって叫んだ。

「キッドとドラミ？あぁ、あのネコ型ロボットだったら、とっくに始末したぜ」

男はニヤリとしながら言った。

「……………嘘でしょ？」

みさえは力なくそう呟いた。

「残念ながら、紛れもない事実だ。」

男はそう言うと、急に窓を開けた。

「そうそう、ここで飼ってる白犬にも、ちょっとイタズラしたんだよね。」

男はそう言うと、犬小屋からシロを家に持って来た。しんのすけたちは、男の腕の中でぐったりしているシロを見た。

「シロ？」

しんのすけたちには信じられない光景だった。なぜなら、シロの体が光っていたからだ。

「おい貴様！！シロに何をした！？」

ひろしは男に怒鳴った。

「ちょっと薬品を注射したのさ。」

男はそう答えると、ポケットから注射器を取り出し、それをしんのすけたちに見せた。注射器の中には、金色に輝く液体が入っていた。

「一体何なのよその薬は！？」

みさえが尋ねた。すると男は、待っていましたとばかりに、

「この薬品は、生物の本来持つ能力を最大限に生かせることが出来る。人間は、本来持つ能力の、ほんの一部しか発揮していないと言われている。この薬品を打てば、その発揮していない能力を最大限に引き出すんだ。」

1年前の段階ではな。」

男はそう言つと、シロを置いた。

「じゃあ……………、今は？」

風間は何かを悟ったのか、恐る恐る男に尋ねた。

「今か？今はそれ以上の能力を引き出せる。人間ならば、超人的な力を手に入れられるんだぜ。」

男はそう答えた。風間はやっぱりという表情をした。そして目の前で光っているシロを見た。

「じゃあ、シロは？」

ネネが男に尋ねた。

「残念ながら、シロは普通の犬ではなくなる。そして……………」

我々の生物兵器となるのだ!!」

男がそう言うと同時に、シロの体に異変が起きた。シロの体がどんどん巨大化し、みさえとひろしが乗れるくらいの大きさになった。そしてしばらくして、シロは目を開けた。シロの目は、あの優しい目ではなく、鋭く、赤い目をしていた。

「シロが……………」

しんのすけは言葉に詰まった。シロの変貌ぶりに驚いた。

「ハハハハハ、コイツはもうお前たちの言うことは聞かない。我々

のもとで働いてもらう。」

男はそう言うと、生物兵器と化したシロの頭をなでた。

「シロ、お前の最初の仕事はな……………、コイツら全員を殺すことだ。」

「シロ!! そいつの言うことなんか聞いちゃいけないゾ!!」

しんのすけが必死でシロに呼び掛けた。しかし、シロはしんのすけの方を向こうとしなかった。

「そんな……………」

しんのすけは更なる絶望に落ちた。

「よし、コイツらを殺せ!!」

男がそう叫ぶと、シロはしんのすけたちに向かって突進してきた。

「に、逃げるんだ!!」

「うわ————!!」

ひろしの掛け声と同時に、しんのすけたちは真横によけた。シロはしんのすけたちがいた場所を通過し、壁を破壊してしまった。

「じゃあ、後は頼んだぜ♪」

男はそう言うと、その場から消えてしまった。

「あぁっ！！逃げられた！！」

ひろしがそう叫ぶと同時に、シロは体勢を立て直し、再びしんのすけたちに向かって来た。

「クソッ！！」

ひろしはそう叫ぶと、自分の持っていたカバンをシロに投げ付けた。しかし、シロはそのカバンをあつという間に飲み込んでしまった。

「やっぱり逃げろー！！」

ひろしの掛け声で、しんのすけたちは家を飛び出そうとした。しかし、

「オラ、ちょっと遅れるから。」

しんのすけは側にいた風間にそう言い残し、家の奥に入っていくってしまった。

「しんのすけ、行っちゃダメだ！！」

風間はそう叫んだが、しんのすけは戻らなかった。

「あいつならきつと大丈夫だ！今はしんのすけよりも、自分が逃げ切ることを考えるんだ！！」

ひろしはそう風間に言いつつ、風間の手を引っ張った。風間はそのまま家の外に出た。

「みんな……………」

外には、しんのすけ以外全員そろっていた。

「しんちゃんは？」

ネネが風間に尋ねた。

「家の奥に入って行ったよ……………。何を考えてんだよアイツは……………」

風間はそう言っていると、家を見た。シロが家から出て来る気配は全くない。

「どうしてシロは僕たちを追って来ないんだろう？」

マサオはそう言いながら首をかしげた。

「多分……………、まだ家の中にいるしんのすけを探しているんだと思う……………。いや、もしかしたら、とくにしんのすけを捕まえて……………、しんのすけを……………」

「止めて！……！」

あいが風間の言葉を遮って叫んだ。

「そうよ……縁起でもないこと言わないでよ……！」

ネネが続いて言った。

「大丈夫よ。しんちゃんならきつとまだ生きてるわよ。」

みさえが風間たちにそう言った。

「とりあえず、ここを離れるぞ。」

「は、はい……………」

ひろしの言葉に全員力無く答えた。そして、シロのせいで目茶苦茶になった野原家から離れた。隣の家の子の北本のオバサンを筆頭に、周囲の家の人々も異変に気付き、避難の準備を始めたようだ。

（どうしてこの2人はそう思えるんだ？どう考えたってしんのすけは……………。）

風間はそう思いながら、自分の横を走っているみさえとひろしを見た。みさえとひろしは、ただ風間たちを守ることだけを考えていた。

（しんのすけ、無事でいてくれ……………。お前が時間稼ぎしてくれたおかげで、十分逃げ切れそうだ。この子たちは俺たちに任せろ。）

（しんちゃん……………。私たちはあなたを信じているわ。）

2人はそれぞれにそう思いながら、風間たちを連れて野原家から離れて行った。

「一体何をやってるんですか？」

その者は急に姿を現すと、キッドの空気砲を掴み、キッドの腕ごと空に向けた。

「ちっ！！」

キッドは舌打ちをすると、空いていた右腕でその者を殴ろうとした。しかし、

「そうはさせないぜ」

新たに右腕を抑える者が現われた。

「お前たち、いつの間ここに……………」。

キッドはそう言うと、ドラミの方をチラリと見た。

「！！」

キッドは愕然とした。そこには、体から煙を出して動かなくなったドラミがいたからだ。ひまわりたち5人もそれに今始めて気が付き、驚いているようだった。

「てめえら、よくも俺の彼女を！！」

キッドはそう叫ぶと、力づくでその者たち2人を降り払った。そしてひまわりたちから離れた。するとその2人は、キッドを前方と背後にそれぞれ立った。キッドはニヤリとして、

「てめえらいいのか？ドラミはドラえもんの妹だぜ？ドラえもんの大親友のくせにこんな風にしちまって、いや、俺の大親友でもあるな。どうなんだ？」

王ドラ、エル・マタドーラ。「

と言った。

「王ドラにマタドーラ……………」

あつ！！あなたたちはもしかして、お兄ちゃんが言っていたドラえもんズ！？」

ひまわりが王ドラとマタドーラに尋ねた。

「ああそうだ。俺たちがそのドラえもんズのメンバーだ。ドラえもんが、キッドにお前たちの様子を見守ってくれと言われたので、君たちも協力してくれと言われたから、タイムテレビでお前たちの様子を見ていたんだ。そしたら……………、このザマだ。」

マタドーラはそう答えた。

「よかったですよ。こまめに様子を見ておいて、ひまわりちゃん、晶子ちゃん、洋介くん、大成くん、ひとしくん。キッドに感謝して

くださいね。キッドがもしそうドラえもんに言ってなかったら、私たちが君たちの元に駆け付けることなんてなかったんですから。」

王ドラはニコリとしながらそう言った。

「……………どういうこと？」

ひまわりたちに意味が分からなかった。

「お前たちは今混乱しているだろう？どうして、今自分たちを殺そうとしているヤツなんか感謝しないといけないんだってな。」

マタドローはひまわりたちにそう言った。

「そうだよ、意味が分からねえよ！！」

大成がマタドローと王ドラに尋ねた。するとマタドローはそれに何も答えず、キッドの方を見てこう叫んだ。

「キッシュとクリームを二にちったー!?」

絶体絶命の、大ピンチだゾ（後書き）

はい、私は酢乙女あいです。10歳になった今でもしん様が大好きですわ。しん様のサッカーをやってる姿、本当にかっこよかったです。

まあそんな話はさておき、今回は、どうにかシロから逃げた私たちを更に襲うものが現われるのですわ。しん様も心配です。一方、マタドーラがキッドとドラミちゃんに言った言葉の意味が明らかになりますわ。じゃあ、次回もお楽しみに。

絶対絶命の大ピンチだゾ・2（前書き）

受験絡みで更新が進みませんでした。一応今日で一段落したので、いつも通りに更新出来ます。さあ、しんのすけの運命やいかに？

絶対絶命の大ピンチだゾ・2

「キッドとドラミをどこにやった!!??」

「えっ!?!」

マタドーラの思いのよらない言葉に、ひまわりたちは思わず声を上げてしまった。

「キッドとドラミちゃんなら目の前にいるじゃない!!」

ひまわりはマタドーラに言った。すると王ドラが、倒れているドラミの体からとび出ている部品を取り出し、それを持ってひまわりたちにもとに歩み寄った。

「ひまわりちゃんたちには理解出来ないでしょうね……。誰がどう見たって、君たちの目の前にいるのは、キッドとドラミさんなんですから。」

姿だけは……………」

「姿だけ？」

王ドラの言葉に、ひとは首をかしげた。

「そうです姿だけです。でも実際は違うんですよ……………」

王ドラはそう言うと、手に持っていた部品を地面に叩き付けた。すると、

“シュー……………”

という音を出しながら、部品を跡形もなく溶けてなくなった。

「……………どうして？そう簡単に金属が溶けるわけないわ！！」

晶子が叫んだ。

「そう、金属は種類によって溶ける温度は違いますが、ロボットの部品として使う金属は、当然常温で溶けるわけがありません。でも、私がさっきまで手にしていた部品は溶けた。」

王ドラが言った。

「じゃあ……、それは一体……………」

大成が言った。

「金属じゃねえってことだ。」

マタドローが口を挟んだ。

「もしコイツらが本当にキットとドラミだしたら、体の中に金属部品が入ってるはずだ。がしかし、ドラミの体には金属がなかった……………」

マタドローがそう言うと、ちょうどドラミの体が溶けてなくなっていこうとしていた。

「……!?」

ひまわりたちは頭が混乱しかけていた。今自分の目の前で起こっていることが信じられなかった。しかしその中でも、マタドローと王ドラが言った意味は、理解出来たようだ。

「じゃあ……………、あのキットと、溶けてなくなったドラミちゃん

は……………」

「クローンだ。」

ひまわりの言葉を遮り、マタドーラが言った。

「しかも相当の完成度ですよ。普通の人間やロボットだったら、間違いないで見破ることは出来ない。優れた科学技術です。」

王ドラはそう言うと、四次元袖からヌンチャクを取り出し、マタドーラの横に移動した。

「へっへっへっへ……………」

突然キッドが笑い出した。

「バレちゃ仕方ねえなあ……………。そうだ。お前たちの言う通り、俺たちはドラ・ザ・キッドとドラミのクローンだ。ちっ、本物がお前たちに注意を呼び掛けていたのは、誤算だった……………。ククク……………」

クローンキッドは、笑いながら言った。

「キッドとドラミはどこにやった!？」

マタドーラが尋ねた。すると、クローンキッドはそれに何も答えず、空気をマタドーラと王ドラに向けた。

「今からぶっ壊れるヤツらに言っても仕方ねえんだよ!! お前らもスクラップだ!!」

クローンキッドはそう叫ぶと、空気砲を2人に向かって乱射し始めた。

「お前らもだと……………?。」

絶対許さねえ!!!!」

マタドーラはそう叫ぶと、王ドラと共にクローンキッドに向かって

行った。その様子をずっと見守っていたひまわりたちは、恐怖で体がガタガタ震えていた。

（お兄ちゃん怖いよ……。私たち、大変な事に巻き込まれちゃった……。キッドとドラミちゃんが……。助けてお兄ちゃん……。）

ひまわりは心の中でそう思った。しかし、ひまわりの思いが届くことはなかった。

「アチヨー!!」

バキッ!!

「ドカーン!!」

「ヒラリ!!」

その間にも、王ドラ、マタドーラ、クローンキッドの戦いは続いていた。

「ここまで来れば大丈夫だろう……………」。

ひろしはそう言うと、走っている足を止めた。みさえや防衛隊も足を止めた。

「随分遠くに来ちゃったわね……………」。

みさえが言った。

「みさえ、遠くなんかない。シロはいずれ俺たちの場所を突き止める。俺たちの匂いをつけて……………。だからまずはここで、作戦を立てないといけない。」

ひろしはみんなに言った。

「そうですね。どっちにしろ、いずれはシロに立ち向かっていかなきゃなくなるんですから。」

風間はひろしに賛成した。マサオやネネたちの中にも、反対する者はいなかった。

「よし、じゃあ始めよう!!」

マサオがそう言ったその時だった。

「そんな所に逃げても無駄だ!!」

突然目の前にあの男が現われた。

「な、なんで俺たちがここにしていることを……………」

河村が言った。

「ふん、俺たちはわざわざお前たちを逃がすようなヘマはしない。
ん？」

男はそう言つと、ひろしたちをしばらく見渡した。そして、

「野原しんのすけがいないようだな……………」

と言い、ため息をついた。

「アイツ、しんのすけが俺たち離れ離れになったことを知らなかつ

たみたいだぜ。」

河村がすぐ横にいたあいになんて小声で話しかけた。

「そうみたい……。だったらどうやって私たちのことを見つけたのかしら……。」

「それどういうことだよ？」

「もし、ずっと私たちの跡をつけて来たなら、しん様がないことには既に気付いているはずですね。」

「そ、そうか……。」

「多分これだ……。」

突然風間が2人の会話に割って入り、河村の服に付着している物を取り、2人に見せた。

「何だそれ？」

河村が尋ねた。

「多分発信機だよ。君がアイツに腹を殴られた時、同時につけられたんだ。」

風間はそう答えた。

「くっそお……。俺はアイツに俺たちの居場所を教えていたってことか……。」

河村はそう言っただけで悔しかった。

「河村くん、大丈夫だよ。」

風間はそんな河村にそう言った。

「どういう意味だよ？」

河村は尋ねた。

「幸いアイツが君に発信機をつけたことで、僕たちと別行動している、しんのすけの居場所が分かっていて。ということは……」

「しん様が生きているか死んでいるかも分からないのですわ。」

風間の言葉に、あいが続けて言った。

「これはもしかしたらチャンスかもしれない。アイツらがしんのすけの行動を把握していなければ、しんのすけはきつて、恐い存在になるからね。」

風間はさらに続けて言った。

「でも、もししんのすけが死んでいたら？」

河村が尋ねた。

「それは……、ゲームオーバーですわ……。」

あいはそう答えた。その横で風間もうなずいていり。

「ちっ……………、全てはしんのすけが生きてるか死んでるかにか
かってるってことか……………」

河村はそう言つと、ため息をついた。

「まあいい、野原しんのすけは後にしよう。先にコイツら全員に消
えてもらわないとな……………」

男はそう言つと、指をパチンとならした。すると……………、

ブーン！！

突然上空に円盤が現われた。そして、地面に向けて光を放つと、円盤の中から何かが出て来て、そのまま地に降り立った。

「！！！！！！」

風間たちは降りて来た者たちを見て言葉を失った。

「さあ、ヤツらを始末しろ！！生物兵器たちよ！！！！」

「シャツ！！！！」

男の呼び掛けと共に、生物兵器たちが風間たちに襲いかかって来た。

「何だよあれ！？でつかい蛇に、バッタ、カマキリ、カニ、そしてカタツムリじゃねえか！！！！」

ひろしが叫んだ通り、襲って来るのは、見た目はそこらへんにいる動物だった。しかし、大きさが桁違いだった。大きいワゴン車並の大きさだった。

「一体どうなってんのよ!?!」

ネネが叫んだ。

「知らないよ!?!」

風間がそう返した。その間にも生物兵器は風間たちに向かって来る。そして、他よりも早く、カマキリが到着した。

シャキン!!

カマキリは鋭い刃をつけた腕を振り上げた。

「もう駄目だよ……………」

ボーちゃんが言った。

「クソー!!! まだまだ大会が続くの!!!」

河村がそう叫んだ。カマキリはそんな中、風間たちに向かって腕を降り下ろして来た。

「うわーーーーっ!!!」

「あれ？」

風間が思わずそう言った。全員で叫び声を出してからだいぶ経っているのにも関わらず、斬られていなかったからだ。
一同は恐る恐るカマキリを見た。

「!!!!」

一同は驚いた。そこにあったのは、カマキリが石になった姿だった。

「ふう……、間に合ったでアール……………」

風間たちは上空から聞こえるその声の主を見ると、一斉に声を上げた。

「ドrameツド3世!」

絶対絶命の大ピンチだゾ・2（後書き）

こんにちは！！僕は出来杉英夫、東京の開成高校の1年生だよ。のび太くんたちが春日部に行ってしまったので、すごく寂しい……………。しかも出番がない……………。今回はそんな僕にしんちゃんが、予告の役目を譲ってくれたんですよ。でも、そのしんちゃんがどこにいるか分からない……………。本編でもしんちゃんが行方不明らしいね。今回は、王ドラ、マタドールに続く、新しい助っ人が登場するんだ。1人は今回で分かったけど、実はもう1人いるんだ！！それは次回のお楽しみに。一方、王ドラ、マタドール、クローンキッドの戦いに動きが見られるよ。さあ、今回はどういう展開になっていくのか、本当に楽しみだね、じゃあ、次回も見てね！！しんちゃん出番くれてありがとう！！

連絡をするゾ（前書き）

風間たちを助けに来たドラマメッド、さらにもう1人登場！！

連絡をするソ

「大丈夫でアールか？」

ドラメッド3世は絨毯から地に降り立つと、風間たちに尋ねた。

「うん……………、何とかね……………」

風間は震えた声でそう答えた。

「それより、何で俺たちがこんな目に遇ったことを……………」
ひろしがドラメッドに尋ねた。

「キッドからのSOSだよ!!」

いきなりドラメッドとは違う声が聞こえてきた。

「マサオくん。今何か言った？」

ネネはマサオに尋ねた。

「えっ？僕は何も言ってないよ。確かに聞こえている声は、僕にそ
っくりだったけど……………」

マサオはそう答えた。すると、

「シュート!!!」

突然飛んで来たサッカーボールが、石になったカマキリに直撃した。
カマキリの石はそのまま粉々に砕け散った。

「ふう………。」

サッカーボールを蹴った者はそのため息をつくど、風間たちの方に顔を向けた。

「やあ、久しぶり!!」

「ド、ドラリーニョ!!」

河村はそう叫ぶと、ドラリーニョにもとに駆け寄り、抱き付いた。

「久しぶりだ!!俺、サッカー上手くなったんだぜ!!」

「そうか、よかったね。」

2人は久々の再会を喜んでいるようだった。

「ドラリーニョくん、キッドからのSOSってどういう意味だ？」

ひろしがドラリーニョに尋ねた。すると、ドラリーニョは河村から離れ、

「うん、それはちゃんと説明するよ！！残りを倒してからね。」

ドラリーニョはそう言つと、残り4体の生物兵器に目を向けた。

「ドラリーニョ！！絨毯に乗るでアール！！」

「うん！！行こう！！」

ドラリーニョはそう言つと、ドラメッドの絨毯に乗り込み、生物兵器に向かって行った。風間たちは、それを不安に見つめていた。

「へっ！ー口ほどにもねえな！ー！」

「そりゃあそうですよ。2対1なんですから。」

マタドーラと王ドラはそれぞれそう言うと、地面にぐったりしているクローンキッドに目を向けた。

「コイツもドラミのクローンみたいに溶けていくんだな……………」

「ですね……………。それより、あの子たちは大丈夫なんですかね……………？」

王ドラはそう言うと、離れたところからこちらを見つめているひまわりたちをチラリと見た。

「確かに、心配だ……………。目の前でこんなもの見せられて、恐くないわけがないぜ……………」

マタドーラはそう答えた。

「とりあえず、まずはあの子たちを保護しないとけませんね。」

「そうだな……………」

2人はそれぞれそう言うと、ひまわりたちのもとに駆け寄った。ひまわりたちは、体が恐怖のせいで震えているように見えた。

「大丈夫ですか？」

王ドラは5人に尋ねた。

「私は大丈夫よ。」

ひまわりはそう答えた。

「俺も平気だぜ!!」

と、大成。

「僕もです。でもこの2人が……………」

ひとしはそう言つと、涙を流している晶子と洋介の方を見た。

「恐かつたろ?ごめんな……………」

マタドローはそう言つと、晶子と洋介の頭をなでた。

「それより、一体何が起こったんですか?」

ひとしが王ドラに尋ねた。

「マタドロー……………」

王ドラはマタドローの方をチラリと見た。

「別に話したって問題ねえよ。それに、コイツらだって気持ち悪いだろ。何にも知らないままなのは。」

マタドローはそう言った。

「そうですね……………」。

王ドローはそう言つと、

「出来る限り分かりやすく話しますから。」

と、ひまわりたちに言い、事件の成り行きを話し始めた。

「コイツらは一体なんなんだよ!?!」

ひろしは、戦いを終えたドラメッドとドラリーニョに尋ねた。

「何か生物兵器って言ってたけど……………」。

みさえが続けて言った。

「うむ。さつきお主たちを襲った怪物たちは、おそらく元は、普通のそこらへんにいる動物じゃろう……………」

ドラメッドはそう答えた。

「でも、何かが原因で怪物になってしまったみたいだ……………」

ドラリーニヨが続けて言った。

「あつ！！もしかして……………」

突然あいが何かを思い出し、隣にいた風間と顔を見合わせた。風間はこくりとうなずき、

「たぶんそれは、特殊な薬のせいです。」

と、2人に言った。

「薬でアールか……………。薬のことなら王ドラに聞くのが一番でアールのだが……………」

ドラメッドはそう言った。

「ドラメッド、王ドラの専門は漢方薬だよ。それに、多分その薬品はどこに行っても手に入らない。誰かが作ったんだ。違法とされている方法で……………」

ドラリーニヨはそう言つと、タイムテレビを取り出した。

「ドラメッド、ドラリーニヨって、俺たちと出会っ前は物忘れが激しかったって、自分で言ってたけど、それって本当なのか？」

河村はそう尋ねた。

「うむ、その通りでアール。その上子供のような性格で、我が輩たちは苦勞した者じゃ……………」。

ドラメッドは懷かしむように話した。

「それが何で、あんなにしっかりするようになったんだろう？」

マサオが首をかしげながら言った。

「治療してもらったのさ」

ドラリーニヨがそう答えた。

「治療したでアールか！？だってお主、以前検査した時は、全く異常なかったでアールよ！？」

どうやらドラメッドでさえも、その事実を知らなかったようである。

「正しくは治療じゃなくて改良って言うのかな？今、ブラジルのチームでプレーしてるんだけど、入団する時に、さすがに戦術とか、サインプレーとかを忘れてしまうのはマズいと思ったから、松橋口ボット工場で改良してもらったんだよ。だいぶお金はかかってしまったけどね……………」。

ドラリーニヨはそう答えた。

「そういうことでアールが……。我が輩たちに伝えてくれなかったのが、残念でアールが……………」

ドラマメッドは言った。

「ゴメンゴメン、あの時ブラジル選手権とリベルタ・ドールレス杯^{カップ}が終盤に差し掛かっていて、後で連絡しようと思ってたんだけど……」

ドラマメッドはそう言った。

「リベルタ・ドールレス杯って何？」

ネネが河村に尋ねた。

「ああ……、南米一のクラブを決める大会だよ。優勝したら、1月に日本に来て、クラブワールドカップを戦うんだ。」

「えっ！？あの大会を！？」

マサオが思い出したように言った。

「そう。」

って話がそれちまつたぜ！！誰か流れを止めてくれよう。」

河村はそう言うと、ドラリーニョとドラメッドの方を見た。

「うん、そうだね。とりあえず、他の仲間たちに連絡してみよう。」

ドラリーニョはそう言うと、タイムテレビのカード入れに、親友テレカを入れた。

「とりあえず、まずはドラえもんに報告を……………」。

ピコン！！ピコン！！ピコン！！ピコン！！

突然タイムテレビから音が鳴り出した。

「呼び出したいでアールな……………」。

「誰からだろうっ？」

ドラリーニョはそう言いながら、赤い呼び出しボタンを押した。

『ドラリーニョ！どうにかひまわりたちを保護したぜ。』

映像が表情されると同時に、マタドーラが話し出した。

「我が輩も一緒にアール。こっちも野原さんたちを助けたでアール。」

ドrameッドがタイムテレビに顔を出しながら言った。

『私もマタドーラと一緒にです。』

マタドーラ側から、王ドラの顔が出て来た。

『まあ、ひとまずは安心だな、後はキッドとドラミの行方を探すだけだ……………。』

マタドーラはそう言うのと、少しだけうつむいた。

「キッドさんとドラミちゃんに何かあったのか!？」

ひろしがタイムテレビに顔を出して尋ねた。

『はい、いつの間にか偽者、クローンと入れ替わっていて、ひまわりちゃんたちが危うく殺されるところでした。クローンは僕たちが倒しました。』

「ふう……………良かった……………」

ひろしがホッとした様子で言った。

「まだ良くないわよ!!」

みさえはそうひろしに怒鳴ると、タイムテレビに写っている王ドラとマタドローに、

「こつちはしんのすけが行方不明なの、シロが変な薬で怪物にされて、逃げようとしている時にしんちゃん、家の奥に入って行ったきりで……………」

みさえは涙を目に溜めながら言った。

『ならば、一度家に戻ってみては?』

王ドラがみさえに提案した。

「そつだよ!!そつしようぜ!!」

ひろしがみさえの両肩を掴みながら言った。

『じゃあ俺たちは、ひまわりたちをドラえもんとセワシの家に連れて行く。何か遇ったら、また連絡してくれ。じゃあまたな。』

マタドローがそう言うのと、タイムテレビの画面が消えてしまった。ドラリーニョはタイムテレビをポケットにしまうと、

「よし、行こう!!」

と言い、みさえたちと共に、野原家に戻り始めた。

連絡をするゾ（後書き）

よっ！！オラ、野原しんのすけ。久々の予告登場だゾ。オラは行方不明だから、今はここでしか出番がないんだゾ……………。そんな話はさておき、今回は風間くんたちがオラを探しに家に戻るんだけど、そこから出て来たのは……………。一方、ひまわりたちをセワシくとドラえもんのもとに届けようとしている王ドラとマタドール。果たして無事に届けられかな？まあ、次回を見れば分かるかもね。じゃっ！！次回も見ろんだゾ！！感想も待ってるゾ！！

ドラえもんのもとに向かうゾ（前書き）

マタドローと王ドラは、ひまわりたちをドラえもんのもとに連れて行くこととするのだが……………。

ドラえもんのもとに向かうソ

タッタッタッタ……

「ハア、ハア、着いた……………」

ひろしはそう言うつと、その場に座り込んでしまった。久々に走ったからだろう。

「しんのすけは!?!」

一方、定期的にひまわりを自転車で幼稚園に送っているみさえは、まだ元気だった。みさえは家に着くなり、早速家に入ろうとした。

「ちょっと待ってください!?!」

風間がみさえの手を掴みながら行った。

「いきなり入るのは、危ない。」

ボーちゃんが言った。

「それもそうね……………」

みさえはそう言うつと、家から少しだけ離れた。

「静かだね……………」

マサオが言った。

「何か不気味……………」

ネネは、マサオの腕を掴みながら言った。

「この様子だと、誰もいないようですね。」

あいが言った。

「じゃあしんのすけは一体どこに……………」

風間はあごに手を当てながら考え始めた。

「とりあえず、何かがあると恐いから、みんなこれを持って。」

ドラリーニヨはそう言うと、ポケットから人数分のショックガンを取り出した。

「もう2度と使うことも、見ることもないと思っていたんだが……………」

ひろしは4年前のことを思い出しながら言った。

「それだけ悪い人がたくさんいるってことよ。」

みさえはそう言うと、一番最初にショックガンを手にとった。その後、ひろしたちは次々にショックガンを手に取り、深呼吸をした。

「準備はいい？」

ドラリーニョがみんなに尋ねた。

「……………」。

みさえたちは何も言わず、ただ首を縦に振るだけだった。

「突入でアール!!」

「オーー!!!!」

ドラメッドの掛け声と共に、一同は玄関から家に突入した。

「マタドロー、少し時間がかかり過ぎじゃないですか？」

「そうか？別に問題ねえと思うがな……………」

一方、マタドローと王ドラは、ひまわりたちをタイムマシンに寄せ、ドラえもとセワシにもとに向かっているところだった。

「ひまわり、2人はどうした？」

マタドローはひまわりにそう尋ねた。

「2人？ああ、洋介さんと晶子ちゃんね。2人なら寝てる。」

ひまわりはそう言つと、ぐっすり寝ている2人を見た。

「そうか……………。泣き疲れちゃったんだな……………。すまなかったな……………」

「えっ？」

ひまわりは、マタドローの言葉に驚いた。

「何が『すまなかった』ですか？」

ひとしが尋ねた。

「そうだよ。俺たち別に悪いことされてねえぞ。」

大成が続けて言った。

「マタドローは、あなたたちにあんな戦いを見せたくなかったんですよ。普通の子供だったら、恐くてトラウマになってしまいうでしょう。現にそこで寝ている2人は相当恐がってたみたいですね。」

王ドラがマタドローに代わって答えた。

「王ドラ、じゃあ私たち3人は普通の園児じゃないってこと?」

ひまわりが王ドラをにらみ付けながら言った。

「えっ!?!いや……………、その……………」。

「それじゃあ何か!?俺たちは変人だと言いたいのか!?!」

言葉に詰まる王ドラに、大成がさらに詰め寄った。

「どうなんですか？」

ひとしまでもが詰め寄った。

「いや、何も私は……………、そういうつもりで言ったのでは……………」

「「「じゃあどういう意味で!？」」「」」

3人が一斉に言った。どうやら3人は、自分たちが普通の園児でないということに、不快感を覚えたようだ。

「ハハハハ、王ドラ、言葉は丁寧に選ぶべきだったな。」

タイムマシンを操縦しながら、その話を聞いていたマタドローは、笑いながら言った。

「で、ですね……………」

王ドラはマタドローの言葉に納得した。

「それよりマタドロー、一体いつになったら着くの？」

ひまわりが尋ねた。

「うーん、キッドのタイムマシンより性能は悪いのは確かだが、こんなにもかかるとはな……………」

マタドローはそう言いながら考え込んだ。

「何か時空間の中で起こってるのでしょうか？」

王ドラはそう言いながら首をかしげた。

「さあな。そういうことは、タイムパトロールでもあるキッドに聞いてみないと分からないぜ。まあ、そのキッドがいないんだがな……………」

マタドローはそう言うと、時空間を眺めた。

「なあ王ドラ、何か周りがさっきと比べて歪んでないか？」

「え？そのですか？別にそんなに変わってないと思うんですけど。」

王ドラはマタドローの言葉をやんわりと否定した。

「マタドーラ、子供たちを不安にさせるような言葉は謹んでください。」

さらに王ドラが言った。

「だ、だって……………」

マタドーラはそう言うと、黙り込んでしまった。

「本当に大丈夫なの？」

ひまわりが王ドラに尋ねた。

「ええ、大丈夫ですよ。時間がかかるのは、きっとマタドーラのタイムマシンの性能が悪いからですよ。」

王ドラはニターツと笑いながら言った。マタドーラは操縦席のコンピュータをいじりながら、

「けっ！言いたいこと言いやがって……………」

と、それだけ言うと、何も話さなくなった。

「あれ？変ですね。私がからかうような発言をすると、必ずマタドーラは食いついてケンカを売りに来るんですが……………」

王ドラはそう言うと、マタドーラの顔を覗き込んだ。

「マタドーラ、どうしたんです……………」

「王ドラ、落ち着いてよく聞け。」

マタドローは、王ドラの言葉を遮った。

「何ですか？そんな怖い顔をして。」

王ドラは尋ねた。

「さっきコンピュータをいじった時に分かったんだが……………」

タイムマシンが完全にイカれちゃったみたいだ……………。」

「えっ!？」

「何だって!？」

王ドラに続いて、すぐ後ろで聞いていた大成が声を上げた。

「それどういう意味なのよ!？」

ひまわりが王ドラの服を掴みながら尋ねた。

「多分……………、ドラえもとセワシのもとには行けないだろうな……………」。

震える声でマタドーラが答えた。

「タイムマシンは、俺たちを乗せたまま時空間をさまよい続け、拳げ句の果てには、ボロボロになった機能停止。そして、いつで、どこかも分からない時代へ不時着するだろう。」

マタドーラは続けて言った。

「うつ……………、うつ……………、嘘つき!！」

ひまわりはそう叫ぶと、マタドーラに飛び掛かろうとした。

「ひまわり落ち着け!！」

「ひまわりちゃん!！」

それを大成とひとしが止めた。

「大丈夫だって約束してくれたじゃない!!なのに、なのに……………」。

ひまわりはそう言うと、その場に座り込んでしまった。

「お前たちには済まないことをした。多分、特殊な電波がコンピュータをイカらせたんだろう。多分その電波を流したのは……………」

「キッドとドラミちゃんのクローンを作り出した組織ですね……………」

「……………」

マタドーラと王ドラの言葉に、ひまわりたちは息を呑んだ。

「とりあえず、ドラメットたちに報告しようぜ。」

マタドーラはそう言うと、ポケットからタイムテレビを取り出そうとした。その時、

ピー……………！！ドカーン！！

「キヤーー!!」

「ウワツ!!」

突然、タイムマシンが進行方向から来たレーザー光線を食らってしまった。ひまわりたち3人は、一斉に声を上げた。

「ちっ!こんな時に敵が来やがった。」

マタドーラはそう言うと、操縦席から離れ、ヒラリマントを構えた。王ドラもヌンチャクを構えた。しかし、

ピーーーーー!!!

ドカーン!!

「は、速い……………」

目に見えない速さで来るレーザー光線を跳ね返すことが出来ず、タイムマシンは完全に機能停止した。

「クソッ!!もうダメだ!!操縦不能だ!!」

マタドローはそう叫ぶと、ひまわりたちを見て、

「全員でタイムマシンから飛び降りるんだ!!」

と言った。

「えっ!?!」

ひまわりたちは驚きを隠せなかった。

「死にたくなかったらとつとと降りろ!!」

マタドローはそう叫ぶと、ひまわりたち5人をタイムマシンから突き飛ばした。

「キャーーーー!!」

「ウーーーー!!」

ひまわり、ひとし、大成、そして、未だに眠ったままの晶子、洋介は、時空間の中に落ちて行き、見えなくなった。

「……………すまない……………。王ドラ、俺たちはヤツラを迎えるぞ。」

「はい!!」

残ったマタドローと王ドラは、間もなく見えるであろう敵を待ち構

えた。

「おかしいなあ……」。

「どうしたでアールか？ ドラリーニヨ。」 「マタドローたちにタイムテレビを繋げても、全く映らないんだよ……」。

「一体どうしたでアールか……」。

「ギャーーーー!!」

「ひろしさんたちの声だ。部屋の奥みたい。行こう。」

「うむ……………」

タッタッタツ…………

ドラえもんのもとに向かうゾ（後書き）

今回の予告は僕、風間トオルだ。ひまわりちゃんたちは、マタドールに突き飛ばされてしまい、いつなのか分からない時代に不時着するんだ。敵を迎え討つ王ドラとマタドールの運命は！？一方、僕たちが悲鳴をあげた理由も明らかになるよ♪じゃないと話が進まないしね。僕個人としては、クレヨンしんちゃんなのに、しんのすけがないということに、違和感を感じているんだけど、読者の皆さんはどうだろう？そこらへんは感想を書いて聞かせてほしいかな。では！！風間トオルでした！！

最悪の事態だソ

タッタッタッ…………

「どうしたでアールか？」

ドラメッドとドラリーニヨは、ひろしたちの悲鳴を聞いて、駆け付けた。

「ひろしさん、一体どうしたの？」

ドラリーニヨは固まっているひろしに尋ねた。

「あわっ……………、あわっ……………」

ひろしは震える手で、悲鳴の原因となったものを指差した。ひろしだけでなく、みさえや風間たちも震えていた。ドラメッドとマタドーラは、ひろしが指差す方向を向いた。

「何でアールかコイツらは!？」

それを見た瞬間、ドラメッドは絶句した。ひろしたちの前に立ちはだかつていたのは、巨大な虫だった。

「あれってゴキブリじゃない？」

ネネが言った。

「確かに良く見たらそうかも……………」。

みさえが言った。

「おいみさえ、ちゃんと掃除してたのかよ？」

突然ひろしがみさえに尋ねた。

「ちゃんとやってたわよ。」

みさえはそう答えた。

「じゃあなんで巨大化したゴキブリが家にいるんだよ!？」

「知らないわよ!！」

「2人共落ち着いてください!！こんな時にケンカしてる場合じゃないですよ!！」

風間は2人の間に割って入り、そう言った。

「あつ……………、そうね……………」

「そうだな……………、タハハハ……………」

（昔から変な一家だとは思ってたけど……………、今でもそれは変わらないみたいだな……………。）

風間は心の中でそう思うと、ため息をついた。

「それより3匹もいるけど、一体どうすればいいんだよ!？」

河村はドラメツドの方を見て言った。

「うむ、例えば薬で巨大化したとしても、所詮はゴキブリでアール。糸を吐けるわけでもなく、毒を持ってるわけでもないでアール。突進してくることにしか出来ないであろう……………」

ドラメツドはそう言った。

「だったらどうすんだよ!？」

河村は尋ねた。するとドラメツドは、ドラリーニヨの方を向いた。ドラリーニヨは、ドラメツドと目が合った時、黙ってうなずくと、ポケットから何かを取り出した。

「スモールライト!!」

ドラリーニヨはそう叫びながら、スモールライトの光を、3匹の巨大ゴキブリたちに当てた。ゴキブリたちはあつという間に小さくなり、普通のゴキブリの大きさになってしまった。

「もうこれで大丈夫だよ!!」

ドラリーニヨはそう言うと、スモールライトをポケットにしまった。

「助かった……………」

河村はそう言いながら、手に持っていたショックガンで、ゴキブリたちを殺した。

「ちょっと河村くん、何やってるの!?!」

あいが叫んだ。

「そうよ！小さくなったんだし、そのまま逃がしてもよかったじゃない！！」

ネネが続けて言った。

「いや、河村くん判断は正しいよ。」

ドラリーニヨが2人に言った。

「どういうこと？」

2人は尋ねた。

「スモールライトの効力は、個人差があるんだ。もちろん、同じゴキブリにもね。ここで殺しておかないと、また大きくなるんだ。」

ドラリーニヨはそう説明すると、辺りを見渡した。

「他に敵はいないみたいだね。あの男もいないみたいだし……………」

「

風間が言った。

「しんちゃんもシロもいないわね……………。どこに行ったのかしら？」

ネネはそう言いながら首をかしげた。

「確かに……………、死体の一つもない……………」

「止めてよー!」

河村の言葉に、マサオが反応して言った。

「ドラマメッド、とりあえず現状をマタドローたちに報告しようよ。」

「うむ。」

ドラリーニョは、ドラマメッドがうなずくのを確認すると、タイムテレビを取り出した。

「マタドローにつなげて。」

ドラリーニョはタイムテレビのマイクに向かって言った。

『ザーザー……。』

「あれ？おかしいな。何も映らないなんて……………」

ドラリーニヨは首をかしげながら言った。タイムテレビに映っているのは、ただの砂嵐の映像だった。

「電波が届かないところにいるんじゃないですか？」

風間が言った。

「いや、親友テレカを挿入してるから、電波に関係なく映るはずなんだ。なのに映ってない……………」

「考えられる原因は？」

あいが尋ねた。

「考えられる原因としては……………」

ドラリーニヨはそう言うと、考え込んだ。

「もしかして、マタドールさんのタイムテレビが壊れてしまったとかじゃ……………」

ひろしがそう言うと、風間たちは一斉にひろしの方を向いた。

「うむ。それは十分に考えられるでアール。しかし、だとするとどうして……………」

「やられたんだよきつ……………」

ドラマメッドの言葉を遮ってドラリーニョが言った。

「それどういう意味!?!」

みさえが尋ねた。

「多分、ひまわりちゃんたちをタイムマシンでドラえもののところに送り届ける途中で敵と遭遇して……………」

ドラリーニョはそう言うと、頭を抱えた。

「そ、そんな……………」

みさえはそう言うと、その場に崩れ落ちた。それをひろしが黙って支えた。その場にいる誰もが、最悪の事態が起こったと確信し、呆然と立ち尽くした。

「……………」。

「ドラえもん……………」。

何も言わず、ただ震えているドラえもんに、セワシが声をかけた。
2人の前に置いてあるタイムテレビの画面には、今は誰もいない時
空間が映っていた。

「王ドラ、マタドーラ……………。うう……………、うう……………」。

ドラえもんはそれだけ言うと、床に伏して泣き出した。

「ドラえもん……………」。

セワシは、ドラえもんを体を包み込むようにして抱き締めた。

「王ドラとマタドーラが……、王ドラとマタドーラが……、僕のせいだ……僕がただ様子を見ることしか出来なかったから、助けに行くことが出来なかったから……。だから……、だから……。」

ドラえもんはそう言うと、更に大泣きした。
今は誰もいない時空間。

しかし、ついさっきまで王ドラとマタドーラがいた。もちろん、ひまわりたち5人も。タイムマシンで、ドラえもとセワシの所に向かっていた。それが、何者かによって妨害され、ひまわりたちはタイムマシンから落ち、王ドラとマタドーラは、一瞬のうちに粉々になった……。それをドラえもんは、ただ見ることしか出来なかった。

「ドラえもん！君が助けに行けないのは仕方がないことなんだよ。君の体は、完全には言うことが聞かないだろ？時々、コンピュータの指令とは違う動きをしてしまう。そんな体で助けに行くのは無理だということくらい、君だって分かってただろ！？だからこうして、今回の未来旅行をここで見守ることにしたんじゃないか！」

セワシは、ドラえもんの体を起こして言った。

「でも……、行こうと思えば行けたんだ……。僕は結局……、親友を見捨ててしまったんだよ……。あの時、命をかけて僕を助けてくれた親友を……。」

ドラえもんはそう言うと、ゆっくりと立ち上がった。

「ドラえもん？」

セワシは、ドラえもんのその行動に驚いた。

「ひまわりちゃんたちを探しに行こう……。今僕に出来ることは、それくらいしかない……。王ドラとマタドーラが、命をかけて守った子たちを、見つけだし、守らなきゃ、王ドラとマタドーラに申し訳が立たない……。」「

ドラえもんは、涙を拭きながら言った。その目からは、もう涙はこぼれていなかった。

「そうだよドラえもん、王ドラとマタドーラのためにも頑張ろう。キッドとドラミちゃんも心配だけど、それはドラリーニョとドラメツドに任せよう。」「

「うん。行こうー!」「

セワシの言葉にうなずくと、ドラえもんはタイムマシンに乗り込んだ。

「ちょっとその前に。」「

セワシがドラえもんに行った。

「何?」「

ドラえもんは尋ねた。

「おじいちゃんたちにも協力してもらおうか?」「

セワシはそう尋ねた。

「うーん……………」

ドラえもんはしばらく考え込み、

「のび太くんたちには迷惑かけられないよ。僕たちだけで解決しよう。」

ドラえもんはそう答えた。

「分かった。じゃあ行こう！ー！」

セワシはそう言うと、タイムマシンに乗り込んだ。2人を乗せたタイムは、時空間の中に消えて行った。

「ひまわり!! ひまわり!! しっかりしろ!!」

「うん……………」

ひまわりは、誰かに体を揺さぶられたために目を覚ました。そして起き上がった。

「大成くん……………」

「よかった…………。無事だったんだ……………」

大成は胸をなで下ろした。

「他の3人は？」

ひまわりは尋ねた。

「それが…………、はぐれちゃったみたいだ……………」

大成はそう答えた。

「そんな……………」

ひまわりはそう言つと、辺りを見渡した。そこは……………、

ただ砂漠が広がっているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4156d/>

ドラえもん&クレヨンしんちゃん ～ひまわりの未来冒険記～

2010年10月9日14時36分発行